

成島柳北『新柳情譜』初編評釈

高橋 昭 男

凡例

一、底本には、『花月新誌』第六十七号（明治十二年三月八日発行）から第七十八号（明治十二年七月三十日発行）まで十二回にわたり連載された「新柳情譜」初編を使用した。

一、翻刻にあたっては、次のような方針で行なった。原文は漢文であるが、送り仮名、返り点がほどこされているので、煩雑を避けるため、原文を訓読文にしてある。ただし、漢字表記は通行の字体を用いた。

一、七言絶句は原文では、振り仮名、返り点がほどこされているが、原詩から送り仮名、返り点をはずし、字体は旧字とし、別に訓読を付した。

一、欄外の頭評には、送り仮名、返り点はないので、旧字の原文通りとし、訓読を付した。

一、頭評には①のように番号を付し、対応する本文にも①のように付した。

一、難読漢字にはルビを付した。

一、すべての訓読文に、現代語訳を付した。

新柳情譜 初編

澤上漁史戯稿
秋風道人漫評

【第六十七号】

古の狹斜に遊ぶ者は、多くは江湖市井の人なり。頃年、世態一変し、^①貴介摺紳、皆な鑣を連ね、輪を接し、争ひて香園粉陣の間に馳騁す。故に翠蛾紅裙の品評、到る処、嘖嘖。而して売文の士、其の情景を記する者、亦た随ひて印行す。積巻累篇、勝て算ふべからず。余老ひたり。復た綺語を以て諸子と抗衡する能はず。^②袖手傍観するのみ。頃日、会ま心疾を患へ、連宵寝られず。耿耿中、戯に平生聞見する所の者を綴り、新橋柳橋校書の為に此の譜を作る。其の文詞、粗笨。

固より観るに足らずと雖も、其の摘評する所、則ち亦た直筆ちよくひつに係る。読者、諒せよ。

○澤上漁史二成島柳北の雅号。○秋風道人二未詳。ただし『花月新誌』第二十二号より第四十八号まで、新橋の花柳街を舞台にした小説「新橋佳話」が、秋風道人編として連載されている。したがって分量からしても、小冊子の『花月新誌』にこれだけのページをさいているのは、柳北と極めて親しい人物と思われる。また、「新柳情譜」と掲載が重なっていないところから、柳北本人の筆名である可能性も捨てきれない。○狭斜二長安の遊里の名。花柳街。○頃年二近年。○貴介摺紳二貴介は高い身分。摺ははさむ。摺紳は笏を大帯にさしはさむこと。転じて朝廷に仕える高官のこと。○鑣二くつわ。轡。○香圍粉陣二鬢付け油の香りと、白粉の匂い。花柳街のこと。○馳聘二馬で駆けまわること。走りまわること。○翠蛾紅裙二翠蛾は緑色の三日月形の眉。紅裙は赤い裳。ともに美女のたとえ。ここでは芸者。○嘖嘖二嘖はさげふ。口々にやかましく叫ぶさま。○印行二刊行。○積卷累篇二多数の刊行物。○綺語二はなやかな詞。○抗衡二互に譲らず張り合う。○袖手傍觀二ふところ手して見物する。拱手傍觀。○耿耿二耿耿はあきらか。気にかかることがあつて、眠れないさま。○校書二芸者。○粗笨二粗いこと。笨もあらう。○直筆二事実をありのまま書くこと。

現代語訳

かつて、花柳界で遊んだ人といえば、大半は世間一般の人たちであつた。ところが近年は、様相がすっかり変わつてしまつた。官界のお役人様たちが、馬車に乗つて競うがごとく花柳の巷に馳せ参じている。そのせいか、芸者衆の品定めといえば、どこへ行つても騒がしく耳に入る。そこで売文の者たちも、花柳界の消息を追いかけるように書きまくつて刊行している。次から次へと数え切れない量だ。今や私も馬齢を重ねた。齒の浮くような綺麗ごとを書き並べて、あの手合いと張り合う気にもならない。どうぞ勝手にと、傍觀するしかない。最近、たまたま気の病で、毎夜不眠がちであつたのだが、眠れぬままに、日頃見慣れた花柳界のあれこれを戯れに書いて、新橋や柳橋の芸者衆のために、この新柳情譜を作つてみた。文章も粗雑で、とても世間にお見せするほどのものではなく、ほんのさわりの人物評ではあるが、ありのままを記述してあることだけは保証する。読者諸君、よろしくお付き合いのほど。

頭評

①宋人觀賈秋壑闘蟋蟀曰是亦軍國重事耶今日摺紳品翠評紅決不出於此蓋亦昇平樂事偶然及之耳漁史不苛論之眞通儒也哉

宋人、賈秋壑かしょうかく、とうししゆつの闘蟋蟀を觀て曰ふ、「是も亦た軍國の重事か」と。今日、摺紳の翠を品し、紅を評するは決して此れに出づ。蓋し亦た、昇平の樂事、偶然之に及ぶのみ。漁史の之を苛論せざるは、眞の通儒なるかな。

②可謂胭脂春秋弟子不能贊一辭
胭脂えんじの春秋と謂ふべし。弟子、一辭を贊すること能はず。

○賈秋壑けあきゅうくわく 賈似道。南宋末期の軍人、政治家。秋壑は号。○鬪蟋蟀とうせきすつ 蟋蟀相撲。賈秋壑は蟋蟀相撲の愛好家で、唐代以降の蟋蟀に関する知識と自身の研究をまとめた『促織そくしき經』を著す。促織はこおろぎ。○軍国ぐんこく 軍事と国政。○品翠評紅しんすいひやう 翠は翠黨、紅は紅裙で、ともに美人のこと。美人の芸者を品評すること。○蓋がい 蓋の俗字。○苛か 苛みだれる。○通儒つうにゆ 博字で万事に通じた学者。○胭脂えんじ 胭脂。紅。花街の芸者を暗示するか。○春秋しゆんちゆう 孔子が編集した中国古代の歴史書。

現代語訳

①宋代のある人が、賈秋壑の『鬪蟋蟀』を觀て言つたという。「ころぎ相撲と言ふのも、また、軍事や国政の大事に似たところがあるのですね」と。最近の紳士諸君が試みる美人の品評も、此れと同じようなもので、太平の御代の遊び事が、たまたまこういうものになつたまでのこと。柳北君が、こういうことを嚴酷には論じないというのは、眞の通儒ということですね。

②花街の史書とでも言うべきものであろう。弟子が一言も加えることはできない。

阿郁あいく (新橋)

①若し好事こうじの人有りて、公選妓会を新橋の地に開かんと欲すれば、則ち其の會長の選に膺あたる者、余必ず阿郁あいくを知る。郁の名、新橋に震ふこと年有り。特り新橋南北の妓流、推して以て泰斗と為すのみならず、他方有名校書と雖も、亦た皆な郁に雁行す。而して彼、絶世の色、抜群の技有るに非ず。唯だ老熟を以て、是の如き地位を占め得るのみ。余が友某々ゆい毎に曰く、「酒間、縦ひ艶麗俊秀の妓有るも、一個の春本婆はるとを着けざれば、則ち人をして楽しませず」と。春本は郁の家号なり。然れども郁、頃年漸く威福を裙釵くんざ社会に弄す。故に後進氣概有る者、往々不平を懷くと云ふ。

老勁憐他媚態無 老勁 憐む 他の媚態無きを

傍花偎柳巧馳驅 傍花 偎柳 巧に馳駆す

披來席上有餘趣 披き來りて 席上 余趣有り

一幅寒鴉枯木圖 一幅 寒鴉 枯木の図

評に云ふ。阿郁蓋し妓中の仲藏なるのみ。仲藏の戲、老熟鍛鍊。看る是れ一場の妙劇。名優悉く備るも、仲藏無くんば、則ち一熱鬧打混し去るに過ぎず。甚麼じんまの場面を做なさん。

○阿郁あいく お郁。以下、芸妓名の阿は「お」と訓む。○公選妓会こうせんぎかい 公選議会のものじり。当時、議會開設の要求が盛んにあつた。○膺あた ヨウ。当る。○特とく ひとり。○妓流ぎりゆう 流は仲間。芸者連中。○雁行えんぎやう 空を飛ぶ雁の列のように、付いて行く。○裙釵くんざ 社会 裙は着物。釵はかんざし。花柳界。○春本婆はると お郁をさす。春本は、郁を抱える置屋

の家号。○弄ノほしいままにする。○老勁ノ老いてなおしつかりしている。お郁をさす。○傍花ノ傍花ノ傍も傍も近寄る。花柳社会のこと。○披ノひらく。おしひらく。○仲藏ノ歌舞伎役者・中村仲藏。初代は名優として知られた。○熱鬧ノ熱鬧。こみ合つてさわがしいこと。○打混ノぶつかりあうこと。○甚麼ノどんな。何。

現代語訳
お郁(新橋)

どなたか物好きなお方がいて、公選妓合なるものを新橋の花柳界に開設しようとすれば、まず、会長として選ばれる者は、私に言わせれば、お郁をおいて外にない。お郁の名声は新橋の花柳界にとどろきわたって何年にもなる。新橋の花柳界の芸者連中がこぞつてお郁を大将にまつりあげるだけではなく、外の売れっ子の姐さんたちも後につづくしかない。それにしても、お郁はとりたて美人というわけでもなく、芸が抜きんでいるともいえない。ただ、花柳社会に熟達していることが、こうした地位を彼女にもたらしているのだ。私の友人はつねづねいうのだが、「お座敷に美人や芸達者がそろつていても、春本の婆さんがいてくれないと、ちつとも座が盛り上がりがないのだ」と。ちなみに春本はお郁の家号である。それにしても、お郁はここ数年、新橋界隈に名声をほしいままにしている。そのため、後につづく意気込のある芸妓たちは、不平を懐いているらしい。

婆さん芸者が客持ちの悪い連中を憐れんで

あちらこちらのお座敷に大持で出入りしている

居並ぶ姐さんたちをかきわけて座につくと何ともいえない雰
気になる
一幅の軸に画かれた寒中の枯れ木に留まっている鴉といった趣
である

評に云う。お郁は数ある芸者のなかで、役者で言えば仲藏とでもい
うしかない。仲藏の芸はあらゆる場面をくぐり抜けた、鍛え上げた
芸風で、そこに居るだけで芝居が出来てくるから不思議だ。名優と
いわれる役者がいくらいても、仲藏が加わらないと、ががやして
いるだけの田舎芝居になってしまう。どんな場面になるのやら。

頭評

①起手何等突兀故不着畧娜婉約語純用議論體妙似其人

起手は何等の突兀とつうぞ。故に畧娜婉約しつうなんやくの語を着せず。純ら議論體じゆんらぎゆんたい

を用ゆ。妙なること其の人に似たり。

②不啻論妓而論人材亦然

啻たに妓を論ずるのみならず、而して人材を論ずるも亦た然り。

③咄咄逼人

咄々人に逼る。

④老熟之怪物乃爾可畏可憎

老熟の怪物は乃ち爾り。畏るべし憎むべし。

○起手ノ手始め。○突兀ノ高くつき出るさま。○畧娜ノしなやかな

さま。なよなよしたさま。○婉妤ニ美しくやさしい。○人材ニ才能。

○咄咄ニ事の意外なのに驚いて発する声。おやおや。
現代語訳

①文章の書き出しは、何という意表を突いていることであろう。こ
とさらに優美な語を使わず、もっぱら議論の文体を用いている。そ
れで妙というのは、作者の人柄に似ている。

②ただ芸者の品評をするというだけでなく、その人の才能について
もふれている。

③何ともはや説得力がある。

④海千山千の芸者というものは、そんなものだ。恐れ多いというか、
憎たらしいというか、いやはや。

小仙（新橋）

小仙、絶艶の名、一時教坊を動かす。而して今、稍や衰ふ。然れど
も彼、猶ほ情痴を以て、江湖に鳴る。蓋し尋常折腰の妓に非ざるな
り。某新聞記者、嘗て仙の私事を摘発し、これを紙上に録し、社丁
をして、高誦、仙の門を過ぎしむ。仙曰く「快なり」。乃ち急に情人
を招き、漆黒の車に同乗し、輓轡れんじ、記者の門を輓過てんかすること数十回。
衆皆な喫驚し、記者も亦た黯あんぜん然ぜん自失す。其の豪邁ごうまい概ね此の如し。仙
原と阪府の歌妓なり。故有りて、籍を東京に移す。而して其の名声、
阪に在るの日よりも盛んなり。仙、毎ごとに云ふ、「妾わが、復た西帰せず」と。

楚材そさい晋用しんよう 古来多こらいおほし 楚材そさい 晋用しんよう 古来多こらいおほし

仙種せんしゅ誰移たれうつ自浪華じりやうか 仙種せんしゅ誰か浪花より移す

附與つきよ東人賞春色とうじんしょうしゅんしき 東人に付与して 春色を賞せしむ

櫻宮うらみや祠畔ひら一株華いちじゅけ 桜宮うらみや 祠畔ひら 一株の花

評ひやうに云ふ。漁史嘗て京猫一斑を著し、京妓を把へて口を極めて打罵し、
一文いちもんに当らず。小仙、蓋し其の説を聴き、豹変する者か。文人一枝の筆、
絶世の佳人をして転念せしむること、此の如し。

○絶艶てつえんたぐいまれな美人。○教坊きょうぼう花街。唐代、都にあつた官立
の音楽・歌舞を教える学校からくる。○折腰せつえ人に頭を下げる。ここ
では媚びを売る。○某新聞記者あつしんぶんきしや柳北は当時、新橋で同業の福地桜
痴と張り合っていたので、この桜痴をさすか。○私事を摘発ししりごとをてきぱつ当
時の新聞は芸者のゴシップ記事を売り物にしていた。○社丁しゃてい新聞
社の使用人。○高誦かうじゆ仙のゴシップ記事を大声で読ませたこと。○
漆黒しやくこくの車くるま人力車。ここでは二人乗り。○輓轡れんじ車や輓轡れんじの回る音
のさま。○輓過れんか輓は車のきしること。○黯あんぜん然ぜんは暗い。憂える
さま。○豪邁ごうまい人に飛び抜けていること。○原はらもと。○阪府はんぷ大阪。
○歌妓かぎ芸者。○藉せき藉は借りの意。芸者は置屋に借金でしばら
れる。○妾めかけわたし。女性の一人称。○楚材そさい晋用しんよう楚の人材を晋の
人が用いる。他国の人材を利用する。○仙種せんしゅ美しい花の種。○桜
宮うらみや大阪市都島区にある神社。桜の名所として知られる。○京猫きやうねこ
一斑いちばん明治六年、柳北は東本願寺翻訳局の局長として京都に赴任。一
年近く滞とど在ざいして、祇園の花街に頻繁に通う。その体験をもとに、祇

園の生態を描いたのが『京猫一斑』で、東京の柳橋の芸者を持ち上げ、祇園の芸者をおとしめている。○転念〓さまざまに想いめぐらして、物事を考えること。

現代語訳

小仙(新橋)

小仙はたぐいまれな美人で名を知られ、かつては新橋の花街にその名をとどろかせた。昨今はややその美貌にも衰えが見えるが、どうして、そのもつて生れた色気は、今なお知らぬ者としてない。つまり、そこいらの客に媚びを売るような連中とは、わけが違ふ。新聞記者のなにかしが、昔、小仙の情事を聞きつけて、新聞紙上に記事を書き、社員にその記事の小仙の家の門前で聞こえよがしに大声で読ませた。すると小仙は、「面白いじゃないか」と言つて、情人を急いで呼び寄せ、黒塗りの人力車に二人で相乗りし、記事を書かせた記者の家の門前を、これ見よがしに往復すること数十回に及んだそう。近所の人たちは、何事ならんと仰天し、その記者もがつくりきて、茫然自失であつたという。小仙の豪快ともいえる氣つ風の良さは、ざつと、こんなところだ。小仙は以前、大阪の花街に出ていた。訳あつて、東京に出ることになつたのだが、大阪時代よりも小仙の名声は高まつたのである。小仙は口癖のように、「あたしは大阪には戻りません」と言つている。

他国の人材を用いるというのはよくあることだが

小仙という名花を大阪から運んできたのは誰だろう

おかげで東京の人間は春景色を楽しませてもらった

大阪で名の知れた桜宮の花盛りの桜の一株のような色香を評に云う。柳北君は昔、京猫一斑という書物を著し、その中で京都の芸者をさんざんこき下ろしたが、一文にもならなかつた。もしかすると、小仙は柳北君の説いた内容を耳にして、東京に鞍替えしたのかも知れぬ。文人の筆のすさびが、絶世の美女に思いもよらぬ決断をもたらしたのであろうか。

頭評

①知是那個

知る是れ那個いづれなるかを

②結不説破妙

結びに妙を説破せず

○説破〓説きつくす。

現代語訳

①人力車の人物が誰かは、すぐ分かる

②結びの書き方は、くどくなくて、さらつとしてゐる

【第六十八号】

小万(新橋)

小万の美、万目皆な見、万口齊く唱ふ。間ま異説有る者は、其の怨

家に非ざれば、則ち妬人なり。余、教坊の美人を歴観する、頗る多し。而して美なる者は往々輕佻浮薄、否らざれば則ち傲慢貪憚、人をして幾個の惜の字を連叫せしむ。独り小万は謹慎にして静淑、宛然良家の子なり。某君嘗て彤管の贈の為に悦懌措かざりしは、亦た輕忽に諷刺すべからざる者有るか。

鏡奩照影皓無塵 鏡奩 影を照らせば 皓として塵無く

聞説仙盟情亦眞 聞説 仙盟 情 亦た眞なりと
只恐嫦娥月中去 只だ恐る 嫦娥の月中に去りて

世間無復這般人 世間 復た 這般の人無きを

評に云ふ。漁史の筆端銳利にして、説き来たり説き去りて、幾個の美人許多の罅漏、罵り得て殆ど完膚無し。独り小万に至りては、絶えて一語の他を貶する無し。大いに是れ怪しむべし。

○怨家〓恨み合う関係にある家。かたき。○宛然〓あたかも。そつくりそのまま。○彤管の贈〓彤管貽(とうかんのい)。赤色の筆軸の贈り物。男女が互いに物を贈つて交際を結ぶこと。○悦懌〓よろこぶ。○輕忽〓軽々しくお座なりな態度をとる。○鏡奩〓鏡匣。かがみばこ。

〔徐幹・情詩〕「鏡匣上塵生」。○聞説〓聞くところでは。○仙盟〓仙界の男女の約束。○嫦娥〓月の別名。月に住む美人の名。○這般〓この。これら。○罅漏〓欠けたところ。物事のすきま。

現代語訳

小万(新橋)

小万が美人であることは、衆目の一致するところ、誰もが口々にその美を称える。時に異をさしはさむ者があるとすれば、商売敵の店者であるか、同僚芸者の単なる妬みであろう。私はこれまで花街の遊びのなかで、数え切れないほどの美人を観てきたが、概ね美貌の芸者の多くは輕佻浮薄であり、そうでなければ、傲慢で金に汚い。顔は綺麗なのだが、態度がねエと客は口々に叫ぶ。ところが、小万だけは慎み深く、物静かで、まるで良家の子女のごとき風情だ。ある人が、かつて小万といい仲になって、大喜びしたそうだが、これを軽率にあれこれ言うのは、如何なものか。

鏡箱の鏡は、光があたると輝いて塵ひとつない

聞くところでは仙界の男女の情もまた眞実だという

この美女が月の世界に行つてしまえば

人界には美人がいなくなつてしまふことを恐れるのみだ

評に云う。柳北君の文章は実にすどく、説くこと縦横無尽、その他大勢も含めて大半の美人を完膚無きまでにこき下ろしている。だけど、小万にだけは一語もおとしめるようなことを言わない。一体これはどういうことだ。

頭評

① 寫出何等靈妙

寫し出して何等の靈妙

現代語訳

(いわゆる美人のことを) 写し出して何とというすばらしさ。

阿貞(新橋)

阿貞、籍を掲ぐるの初め、名声甚だ微なり。余、一日、平井氏を過ぎ、一校書の細類尖頤さいようせんいの者を見る。これを問へば、即ち是れなり。當時、窃に謂ふ、「是れ凡種のみ」と。未だ幾ならず、貞の名遽むかに噪ぐ。評者或は云ふ、「小万・鳥介と相匹す」と。余、喫驚す。往きてこれを窺へば、則ち依然たる阿蒙のみ。但だ其の衣服簪釵しんさいは、則ち上等妓流の物なり。余、甚だ訝る。一友、余を嘲りて曰はく、「子①、訝るなかれ。それ伯楽一顧すれば、則ち驚馬も亦千里の名を得ん。貞や、凡と雖も亦た驚馬と異なり。子、唯だ馬有るを知りて、伯楽有るを知らず。何ぞ其れ迂なるや」と。余、釈然として悟る。古人云ふ、「士は己を知る者の為に死す」と。余、為に一転語を下して曰はく、「妓は己を愛する者の為に貴し」と。未だ知らず、当否如何を。

縦然草木竟無心 縦然たんとひ 草木 竟に心無きも

應謝東君寵眷深 応に謝すべし 東君 寵眷ちゆうけんの深きを

② 一自春風入南畝 一たび 春風の南畝に入りしより

菜花忽地化黄金 菜花 忽地こつちに黄金に化す

評に云ふ。趙端々は奇醜の名。曲中に噪ぐ。名人の一詩を得て、其の価遽に高し。然れども、お貞も亦た一佳妓。恐らくは漁史の評、矮曲にして過直なり。呵々かか。

○籍を掲ぐ〓芸者としてお披露目する。○平井氏〓置屋の名か。「平井」氏は漢語的表現。○鳥介〓とりすけ、という売れっ子芸者の名か。○依然〓もとのまま。○阿蒙〓子供。○簪釵〓簪も釵も、かんざし。○伯楽〓古代中国で、馬の良否をよく見分けた人で、姓は孫名は陽。○千里〓千里を走る馬。○釈然〓疑いや迷いが解けて、心がからりと晴れるさま。○士は己を知る者の為に死す〓『史記』刺客伝・予讓「士為知己者死」。○転語〓言葉を転じた言い方。○貴〓珍重すべき価値がある。○縦然〓たとい。縦令と同じ。○東君〓春の神。○寵眷〓特別に目をかけること。○南畝〓田地。○忽地〓たちまち。○趙端端〓未詳。○曲中〓曲輪くわの中。ここでは、新橋の花街。あるいは、中国・南京の歓楽地・秦淮にある旧院という花街の別称。○矮曲〓歪曲。ゆがみ曲げること。○過直〓過度にまっすぐなこと。○呵呵〓大声をあげて笑うさま。

現代語訳

お貞(新橋)

お貞はお披露目した当時は、あまり知られていなかった。私は、ある日、平井の家に寄ったところ、顔が小さく、あごの尖った芸者を見かけた。何という名の妓なの、と聞くと、これがお貞であった。その頃は、こいつは売れっ子にはならないなど、何となく思っていた。ところが、いつの間にか、お貞の名前をあちこちで聞くようになって、消息筋によると、小万や鳥介並の売れっ子なのだという。私は吃驚仰天して、平井に行つて覗いてみたら、何のことはない、前と同じ

のおぼこではないか。なのに着物や髪飾りは格上の芸者と同等なのだ。私は一体どういうことなのか、分からなかった。すると、ある友人が小馬鹿にしたような口ぶりでいうには、「何のことはない、ホラ、よく言うでしょう。伯樂がひと目見れば、馱馬も千里を走る馬になってしまふと。お貞もそこの女の子と同じように見えるが、そうではないのよ。お前さんにはそう見えただけの話で、実は名伯樂がいたことです。お前さんにしては、迂闊だよな」と。私はなるほど、そうか、と合点した。古人は言った。「武士は己を知る者の為には死をも恐れぬ」と。そこで私も言葉を変えて、「芸者は己を愛する者の為には、貴いものになるのだ」と。さて、これが当たっているかどうかは、何とも言えないが。

たとえば草木に当然のことながら心がないとしても

やはり感謝すべきであろう、春の神様が特別に目をかけてくれた

さるのを

いったん春風が田畑に吹き込んでくると

菜の花畑があつという間に黄金色になつていく

評に云う。趙端端とは、とんでもない不美人で、花街の中では評判であった。ところが、さる高名な人が、この妓女を詩に詠んだとたん、売れっ子になったという。お貞もまた佳い妓ではあるが、どうやら柳北君の品評には、事実に反するところがあり、言い過ぎではないか。ハッハッハ。

頭評

①不直道破將妙喻來隱々着意何等巧致漁史真妙人也哉

直に道破せず、妙喻を將つて来る。隱々たる着意、何等の巧致。漁

史は真の妙人なるか。

②着眼第三句

第三句に着眼せよ。

○道破Ⅱ言い尽くす。○隱々Ⅱ表面にあらわれず、内に隠れているさま。○着意Ⅱ着想。○妙人Ⅱすぐれた人。

現代語訳

①直接的な表現を用いず、巧みな比喻であらわしている。あからさまでない着想、他に類を見ない技巧。柳北君の文章こそ、本當の才筆と言えらるだろう。

②第三句は注目に値する表現だ。

【第六十九号】

小松（新橋）

謫仙、句有り、云ふ、「一枝の濃艶、露、香を凝す」と。方今、新橋の紅裙、能く一個の濃の字に抵得る者、独り、小松有るのみ。遊客、若し瀟灑冷淡し、秋蘭水仙の如き者を得んと欲せば、則ち宜しく他に問ふべし。小松、其の選に非ざるなり。然れども桜花霞蒸、海棠雨滴るの情致を愛する者は、則ち小松を捨て、將に安に往かんと

す。宜べなり、友人某子の情を斯の人に鍾つとむるや。小松の家、号して村田と曰ふ。而して新橋、更に升屋小松なる者有り。是れ同名にして異人。

人間艶福有誰争③ 人間の艶福 誰有りて争はん

卿愛阿郎郎愛卿 卿は阿郎を愛し 郎は卿を愛す

夢裏香閨春若海 夢裏 香閨 春 海のごとし

嬌鶯一夜不停聲 嬌鶯 一夜 声を停めず

評に云ふ。某氏の狎じやうじやう暱を借りて、箇の話頭と做す。也また是れ一変調。漁史花を生けるの筆、変化窮まり無き、此の如し。

○謫仙① 天上から下界に流された仙人。ここでは李白をさす。○一枝濃艶露凝香② 李白の清平調詩「一枝の濃艶露香を凝らす 雲雨巫山枉あやまげて断腸 借問かたがす官宮誰か似たるを 可憐の飛燕新粧に倚る」。○濃艶③ 詩では牡丹をさす、同時に楊貴妃を示す。○凝④ 固まる。集中する。○抵⑤ 相当する。○瀟灑⑥ さっぱりとして清らか。すつきりして垢抜けた。○秋蘭⑦ ふじばかまの異名。○情致⑧ 趣。○鍾⑨ あつめる。○艶福⑩ 異性に愛される幸福。○卿⑪ 男子が妻に對し用いる尊称。○阿郎⑫ 女が想う男を親しんでいうこと。○香閨⑬ 女の部屋。○嬌鶯⑭ 可愛い声でなく鶯。○狎暱⑮ なれしたしむ。○話頭⑯ 話のきつかけ。○生花⑰ 花を生ける。花は女性のこと、次々と芸者を品評すること。

現代語訳

小松(新橋)

謫仙李白に、こんな詩句がある。「一枝の艶やかな牡丹に、露がやどり、香を凝結させた」と。近頃、新橋の芸者連中のなかで、濃艶という字があてはまるのは、小松だけである。お客のなかで、すつきりして垢抜けた、まるで秋のふじばかま水仙のような芸者がお望みなら、別の芸者を捜したほうがよろしかろう。小松はそういう好みの客にかなう芸者ではない。しかしながら、桜の花が霞のたなびくように咲き、雨に濡れた海棠の花の風情を愛する者は、小松のほかに、行くところはないであろう。友人の某が、小松のところに入りびたりに、小松無しではいられない、というのももつともだ。小松を抱えている家は、村田という。ちなみに、新橋には別に升屋小松というのもある。この芸者は名は同じだが、別人である。

男女が愛し合うことは、二人だけのこと

お前は私を愛し、私はお前を愛す

夢うつつの中で、お前の部屋は春の海のようにおだやかだ

夜通し可愛らしい鶯の声が鳴きつづけている

評に云う。某氏が小松に狎れ親しんでいるのを借りて、話題にしているのだが、これもひとひねりした趣向。柳北君の芸者品評の文体が、まことに変化自在であることの、一例である。

頭評

① 將濃字索性描出使人神往魂飛

濃字を將つて、索性、描出す。人をして神の往きて魂を飛ばしむ

②照應有意無意之間殊有情致

有意と無意の間に照応して、殊に情致有り

③如觀一幅春宵秘戲圖漁史錦心繡腸他人決學不得

一幅の春宵秘戲圖を觀るが如し。漁史の錦心繡腸、他人は決して學び得ず

○索性Ⅱいっそ。思い切つて。○有意無意Ⅱ意味の有る無し。○情致Ⅱおもむき。○錦心繡腸Ⅱ美しい思想と美しい心。美しい表現。

現代語訳

①濃という字を使って、一筆書きに、さつと描き出す。まるで神業だ。

②意味が有ることと、意味が無いことの間、まことに趣がある。

小松と花々との照応に情致を見ている。

③春の夜長に戯れる男女を描いた一幅の絵をみているようだ。柳北君の美しい表現は、到底、他人には手の届かない境地である。

小留(新橋)

小留は尤物なり。初め三勝と号す。籍を新橋に掲ぐる、日、猶ほ淺し。而して名、既に儕輩に超ゆ。其の容姿を評すれば、則ち儼として最上等に在り。故に客の留に朵頤する者、日に多し。然れども世の薄命女子を算すれば、則ち留も亦た、最上等に居る。何ぞや。蓋し留、往時、溼の梅隣亭に居る。後、流離転遷して、竟に狹斜に墮つ。

萍因絮縁、殊に悲しむべしと為す。聞く、留、老萱有り。性、貪悭、

毎に悪少と謀り、留を以て餌と為し、豪客を釣る。詐偽百出、客の財を攫む。猶ほ厭かず。併せて留の衣裙を褫ひ、皆、これを典売す。

人、留を呼んで、笄姐と曰ふ。其の衣裙隨ひて製すれば、隨ひて褫

ふ、宛も簪を剥ぐがごときを以てなり。留、客年、褫剥の難を避け、小万の家に寓す。今春、別に一戸を為し、浜舎の嫗、為に百事を幹すと云ふ。知らず、老萱猶ほ悪技倆を逞し得るや、否や。

情盟豈暇說纏綿

情盟 豈に纏綿を説くに暇あらんや

帶雨尤雲幾處遷

帶雨 尤雲 幾處に遷る

寄語行人莫相近

語を寄す 行人 相近づく莫かれ

名花開在瘴江辺

名花開きて 瘴江の辺りに在り

評に云ふ。粉頭の阿嬢・阿哥、多くは是れ無頼の破落戸。即ち此の嫗の所為も亦た常套なるのみ。然れども、薄命多難、人をして憐愛の心を生ぜしむ。復た亦た此に在り。其の幸不幸、未だ知るべからざるなり。

○尤物Ⅱ優れている人。美人。○儕輩Ⅱ仲間。ともがら。○儼Ⅱお

ごそか。○朵頤Ⅱ物欲しげなさま。朵はうごかすの意。○溼Ⅱ溼東

の略。向島のこと。江戸時代から料理屋が多かった。○梅隣亭Ⅱ寺

島にあった料理茶屋の名。仮名垣魯文の『安愚楽鍋』に見える。○

萍因絮縁Ⅱ萍は浮草、絮は綿毛。浮草稼業のこと。○老萱Ⅱ老母。

萱は萱堂で、母親の意。○悪少Ⅱ不良少年。○饜Ⅱあきる。○褫Ⅱ

うばう。○随い言いなりになる。たびごとに。○籀タク。竹の子の皮。○客年去年。客歳。○浜舎浜家。はまや。○情盟男女間の誓いや約束。○纏綿心にまとわりついて離れないさま。男女の情愛のふかいこと。○霪雨霪はとどまる。○尤雲霪雨男女が情を通じること。雲雨からくるか。詩文に用いられる。○寄語言づてする。言葉を与える。○瘴江毒気がただよう川。ここでは下ブ川。○粉頭妓女。○阿嬢阿哥お袋と親父。

現代語訳

小留(新橋)

小留は美人である。初めは三勝と名乗っていた。新橋でお披露目してから、それほど日は経っていないが、その名は芸者連中に抜きんでている。容姿端麗、他の追隨を許さない。したがって留を座敷に呼びたがる客が日増しに増えている。一方、世間には多くの不幸せな女性がいるが、留もまたその連中の最右翼にいるのだ。何故だろう。もともと留は向島の梅隣亭に居たのだが、その後いろいろあつて、花柳世界に足を踏み入れた。浮草稼業であるから、嫌なこともあつたであろう。何でも、留には老母がいるそうだが、これが強欲な女で、いつも悪党共とたくらんで、留を色仕掛の餌にして、金持の客をひっかけ、嘘八百を並べて金をせしめることきりが無い。おまけに留の高価な衣装を勝手に持ち出しては、売り飛ばしている。だから周りの人たちは、留のことを竹の子芸者といっているような。言われるがままに衣装を作れば、そのまま持つていかれる。まるで竹の子の

皮を剥くがときであったという。さすがに留もこれでは切りが無いと、去年から小万の家に身を寄せていた。この春、新しい住いに移り、浜家の女将が面倒を見ているそうだ。とは言え、強欲老母が、いろいろ画策して様子を窺っているかもしれない。

男女が深い仲になつても、別れはいつかは来る

情が通じ合っているようでも離ればなれになるのだ

道行く人に言っておこう、そばへ寄つてはいけないよ

美しい花は毒気の漂う川の辺に咲いているものだから

評に云う。妓女のお袋や親父の多くは無頼のごろつきだ。だからこの強欲婆さんのやり方も珍しくない。不幸せで苦勞つづきとくれば、誰だつて可愛そうに思ふもの。どこにでもあることだが、人の不幸は、計り知れないのだ。

頭評

①僕昔嘗遊梅隣亭見一少女子豊頬曲眉肌膚雪白問之則主人女也斯子或其人歟敢問

僕、昔、嘗て梅隣亭に遊び、一少女子を見る。豊頬、曲眉にして、肌膚は雪白。之を問ふに、則ち主人の女なり。斯の子、或は其の人なるか。敢て問ふ。

②好名字翠袖倚竹者蓋其人

好名字なり。翠袖倚竹は、蓋しその人なり。

○翠袖倚竹杜甫「佳人詩」天寒くして 翠袖薄く、日暮れて 脩

竹に倚る」。

現代語訳

①私は昔のはなしたが、梅隣亭で遊んだことがある。そのとき一人の少女を見かけたのだが、ふつくらした頬、三日月眉に雪のような白い肌であった。聞いて見ると、その少女は主人の娘で、もしかすると、これが小留なのかもしれない。念のため、お尋ねする。

②（笥姐とは）よくぞ名付けたものだ。翠袖倚竹の不幸な美人のような小留である。

【第七十号】

阿染（新橋）

秦淮西湖の綺羅叢裏、文字を解し、詩賦を善くする者、何ぞ限らん。我が東京の妓流に至りて、其の數、数千に下らず。而して一個の字を識る者無し。真に嘆すべきかな。然れば則ち、超凡拔群、新橋阿染の如き者、豈に噴々稱賛せざるを得んや。阿染の別号、紫園。才、鋭に、氣、豪なり。宴席に在りて既に酔へば、則ち雄弁快論、丈夫を圧倒す。家に在れば心を潜めて書を読む。其の賦する所の和歌、亦た誦すべき者有り。新橋の諸楼、客の女学士を聘し來たれと命ずる者有れば、楼丁、其の人を問はずして、直に阿染の家に奔る。然れども学士老ゆと雖も猶ほ情を忘る能はず、時に艶聞有り。女中の白傅と稱すべきか。

玉織磨墨拂雲箋

玉織 墨を磨して 雲箋を払ふ

④ 閨秀才名世久傳 閨秀の才名 世 久しく伝ふ

翻笑風情未銷盡

翻りて笑ふ 風情 未だ銷え尽さざるを

池塘春草夢猶牽

池塘の春草 夢 猶ほ 牽かる

評に云ふ。深川、嘗て一妓有り。和歌を善くす。素と某先生に事へ、側室たり。名、一時に噪ぐ。久しく既に落籍し、今は則ち蒼然として老ひたり。然れども粉を搽し、紅を点じ、風情、少年に減ぜずと云ふ。此の阿染と一雙の奇女子と謂ふべし。

○秦淮 秦代につくられた運河。南京市の南東を通り、長江に入る。

その兩岸は南京の歡樂街として栄えた。○西湖 杭州の近くにある湖。古來景勝地として栄える。○綺羅 美しい着物。または、それを着た人。○叢 あつまる。綺羅叢裏で歡樂街の妓女たち。○噴噴 大声でさげふ。○白傅 白居易のこと。太子少傅（官名）に任ぜられたのでこういう。○玉織 美人のほっそりとした指。○雲箋 美しい手紙。○翻 却つて。○風情 すがた。○池塘春草 夢 朱熹の「偶成詩」。「少年易老学難成 一寸光陰不可輕 未覚池塘春草夢 階前梧葉已秋声」。○蒼然 毛の白いさま。○搽 塗る。

現代語訳

お染（新橋）

秦淮や西湖の花街の妓女たちは、文字の読み書きが出来、詩や賦を上手に作れる者が、いくらでもいた。今の東京には数千人以上の芸者がいるが、満足に読み書き出来る者は、殆どいない。まことに

嘆かわしいことである。となると、凡百の芸者を尻目に抜きんでている新橋のお染のような者は、声を大にして称賛せずにはいられない。お染は別に紫園と号している。頭脳は賢く、気性は豪胆で、宴席で酔えば、雄弁にして論旨明快、男共もたじたじである。家にいるときは心静かに読書をする。そして和歌を詠ませれば、これまた優れた歌詠みだ。新橋のどの店でも、学があつて話を通じる芸者を呼べと客のご下命があれば、若い者が誰それでも、まつすぐにお染の家へすつ飛んで行く。そのお染も近頃は年寄染みてきたようだが、情味のある応対は変らないそうで、たまさか艶っぽい話もあるとか。まあ、それは女中たちの噂話程度のものであろう。

美人がほっそりとした指で墨をすり、手紙を書いている
この才媛の文名は世間に長く知られている

却つて笑う、あの頃の風情は未だにただよっているのを

池のほとりの春草の上で見た夢を、なおも忘れかねている

評に云う。深川に以前、和歌を嗜む芸者がいた。初めある歌詠みに師事し、側室となつた。それで一気に名を挙げた。それから身請けされて、今は年取つてすつかり白髪頭になつた。それでも白粉を塗り、紅をさして、その姿は若い頃のままだそう。ちょうど、お染と一対の稀な美女と言つてもよからう。

頭評

①妓而知文字者是文人第一主顧不得不極力褒稱

妓にして文字を知る者は、是れ文人第一の主顧なり。力を極めて褒め称へざるを得ず。

②妙

③更妙

④或云善詩喜論的是學士家陳套有甚麼好處反有箇風情未鎖者大是強人意此亦一説

或ひは云ふ。詩を善くし、論を喜ぶことは、是れ學士家の陳套なり。甚麼の好処有るや。反つて箇の風情有。未だ銷えざる者有るは、大いに是れ人意を強くす。此れも亦た一説なり。

○主顧||相手となるもの。顧客。○陳套||古くさい。珍しくない。陳腐。○甚麼||何の。

現代語訳

①芸者ながらも立派な文章をものする者は、文人第一の相手である。いくら褒めても、褒め過ぎることはない。

②すばらしい。

③これまたすばらしい。

④さらに言えば、詩を嗜み、議論を喜ぶことは、学者なら当然のこと、今さら言うまでもない。しかし、芸者の身で、一体どういことがあつて歌などを詠むのだ。そういう風情が残っているというのは、大いに心づよいことだというのも、一説である。

国助(新橋)

諸友、嘗て烏森の一楼に飲み、相ともに快事を談ず。各々、其の適する所を説く。余、曰はく、「若し^①一富翁有り、数千金を以て、国助に贈り、彼をして随意揮霍せしめて、傍らよりこれを観る。亦た快ならずや」と。衆、皆、哄笑す。新橋の妓、多し。而して清貧国助の右に出る者無し。国助、毎に情誼を重んじて、貨財を軽ろんず。薪米、屢々空しうして、晏如たるなり。人皆、其の痴を嗤ふ。而して余は特に其の達に服す。

可憐生計阿誰知 可憐の生計 阿誰か知る

情界委身痴又痴 情界 身を委ねて 痴 又た痴

却喜風丰瀟洒好 却つて喜ぶ 風丰 瀟洒として好きを

翠蕉露滴早涼時 翠蕉 露滴る 早涼の時

評に云ふ。黄金を視ること糞土の如く、弱を扶け、強を排す。是れ所謂^{いふ}の江戸氣象なる者。娼妓声妓の輩、昔、往々これ有り。今は則ち一味柔軟。唯だ阿堵物、是れ貪るのみ。凶らざりき、此の妓有るとは。空谷の聲音。荊棘中の梅花なるかな。

○烏森 現在の新橋駅付近の地名。かつて花街があり、新橋南地といわれた。○揮霍 金品を無駄遣いする。ふりすてる。○情誼 人情と義理。○晏如 安らかなさま。○達 物事にこだわらないさま。○服 心服。感服。○阿誰 だれ。○風丰 風貌に同じ。容子。○阿堵物 お金。○空谷聲音 人氣の無い谷で、突然人の足音を聞く。

珍しいこと。予期しない喜び。

現代語訳

国助(新橋)

いつもの連中と、以前、烏森のある家で飲み、たがいに愉快な事とは何だろうと語り合った。それぞれこれぞというものをあげたのだが、私の話はこのだ。「金持ちの爺さんがいて、大金を芸者の国助に贈り、国助が気の向くままにその金で大盤振る舞いするのを、ワキで眺めている、というのはどうかしら、愉快だぜ」。一同、皆で大笑した。新橋にはあまたの芸者がいるが、清貧という点では、国助をおいて他にはないだろう。国助という芸者は、義理と人情ひと筋で、金にはとんと無頓着だから、薪も米も空っぽなんというのはしよつちゅう。でも、平然としている。周りの人たちは、国助の愚かさを笑っているが、私は、そういうこだわりのなさに感じ入るのだ。

国助の貧乏暮らしを誰も知らない

義理と人情の世界にどっぷりと浸かって、愚かもいいところ

にもかかわらず、その風貌は垢抜けていて何ともいい感じ

初秋のころ芭蕉の緑の葉が露に濡れている、涼しげな風情を見ているようだ

評に云う。金なんか糞くらえ、弱きを助け、強きを挫く、これぞ江戸つ子氣質。女郎にしる、芸者にしる、昔はこういう気風であった。それが今では、だらだらしてしまわなく、お金ばかりを欲しがらる。

そんな風潮のただなかに、国助のような芸者がいてくれる。貴重なこと、空谷の足音、茨のなかの梅の花のようだ。

頭評

① 奇想

② 国助之胸襟反自漁史口中説出叙事極變

国助の胸襟 反つて漁史の口中より説き出だす。事を叙するに変を極む。

③ 結毎出意表何等絶妙

結びは毎に意表に出づ。何等の絶妙。

現代語訳

① 思いもつかない着想だ。

② 国助の胸の内は、却つて柳北君の口から説き出されている。事の次第を述べて、まことに変幻自在である。

③ いつものことだが、話の締め方が人の意表を突いて、絶妙この上ない。

【第七十一号】

小徳(新橋)

金春教坊、若し静婉^{せいかん}女子を索^{もと}むれば、則ち其の選に膺^ある者は、小方に非ざれば、必ず小徳なり。徳は容姿嬌柔、多情寡言、其の品格を評すれば、衆妓皆な下風に立たざるを得ず。蓋し徳の家、頗る富む。

其の屋宇は巍然^{げいぜん}、豪商大賈^{たいてい}の如し。故に其の平素の養成、良家の子女と一般。是れ其の品格をして高尚ならしむる所以なり。然れども、挑達^{てうたつ}の客、多くは其の澹泊無味を以て、これを擯^{ひん}す。亦た已むを得ざる者有り。徳の情人に於ける、能く一を守り、岐路に走らず。爺嬢、其の人を喜ばず、屢々破鏡を説く。徳、百方^{ひばう}弭縫^{みほう}し、以て其の好みを絶たず。蓋し尋常輕薄女子と、其の臭味を異にする者か。小浜は徳の姉なり。亦た籍を掲げて技を售^うる。然れども、名声、徳に及ばざること遠し。

仙桂 誰か言ふ 攀つべからずと

播將情種在人間 情種を播き將つて 人間に在り

南康應有猶憐語 南康 応に猶ほ憐語有るべし

玉鏡奩前沐翠鬢 玉鏡 奩前 翠鬢を沐す

評に云ふ。筵に侍し酒を侑^{すす}む。必ず善く歌ひ善く弾ずる者を用ふ。是れ古は、宴、声楽を用ふるの遺意なるのみ。近世、唯だ便妍^{べんげん}巧媚、說辭を善くする者を取る。其の次は則ち容貌^{くわんざう}稍美に、暗黙呆坐、終席、一言を発せず。客推^おして名妓と為す、殊に笑ふべきなり。然れども、漁史の徳を称する、此の如し。吾、其の必ず選に異なるを知る。

○金春教坊 新橋にあつた金春新道という花街。現在の銀座八丁目。
○静婉 婉はしとやか。○嬌柔 艶やかで心優しい。○養成 申しこむ。育成。○巍然 山の高く大きいさま。○大賈 大商人。○挑達 相会うさま。○澹泊 心があつさりして、無欲なさま。○擯 申し

りぞける。○爺嬢ニ父母の俗称。○破鏡ニ夫婦が離別すること。○弥縫ニ取り繕うこと。○售ニうる。○仙桂ニ月中にあるという桂の木。ここでは美女をいうか。○南康猶憐ニ「蒙求」の一句。東晋の桓温の妻、南康公主は嫉妬深く、妾のところへ暴れ込んだが、その端麗さを感じて哀れみをかけた故事。○奩ニはこ。○翠鬢ニ美人の髪のこと。○沐ニあらう。○侑ニすすめる。○便妍ニ身軽で美しい。現代語訳

小徳（新橋）

金春新道の花街で、物静かでしとやかな芸者を捜すなら、選ばれるのは、まず小万、さもなければ小徳である。徳の容姿は艶やかで優美、情が深く物静か、品格からすると、他の芸者連中になかなう者は一人もいない。そもそも、徳を抱えている家は金持ちで、建物などは宏大で、豪商の住いのような。その家での育ち方は、良家の子女と同様である。要するに、品格が高尚なのも当然なのである。ところが、大半の客は小徳を座敷に呼んでも、お品が良いだけで、ちつとも面白くないから、もう来なくてよい、という。これもまた仕方のないことだ。徳は情人の客が出来る、その男ひと筋で、決して浮気をしない。抱え主の仮親は、その男と別れるとせまる。徳は、ああだこうだと言いつくろつて、その男との関係を変えようとはしない。だから、そこいらの軽薄な芸者とはひと味も、ふた味もちがうのだ。小浜という芸者は徳の姉だが、お披露目して座敷に出て、その評判は徳には遠く及ばない。

月の桂の樹には、言うまでもなく、登ることはできない
その月の桂の種から生れたような女が、この俗世間にいる
南康公主が亭主の妾に憐れみをかけたような

そういう美しい女が、鏡と化粧箱の前で、翠の黒髪を洗っている
評に云う。宴席に侍つて酒をつぐ芸者には、何はさておき歌や三味線の芸が達者な者を選ぶものだ。これは昔の宴席では音楽を用いたことの名残りである。ところが近頃ときたら、色気たっぷり、口先だけは達者なお調子者が喜ばれる。それでなければ、器量が少しよくて、黙りこくつて、ぼんやり坐つたまま、お開きまで口をきかない。そんなのを、客は好んで名妓呼ばわりする。まったく笑止千万である。とは言うものの、柳北君が称賛している徳なる者は、そういう女だ。私の趣味ではないがね。

頭評

①世間厦屋女子反有輕桃浮華如聲妓者恥乎徳多矣然妓之高自標置傲
晚生客則甚可憎也如此妓蓋無其累耳

世間厦屋がやの女子、反つて輕桃浮華、声妓の如き者有り、徳に恥ずること多し。然るに妓の高みずかく自ら標置して生客を傲視するは、則ち甚だ憎むべし。此の如き妓、蓋し其の累無きのみ。

②泊澹無味之女子便如此蓋彼澹者澹於凡客熱者熱於情人
泊澹無味の女子、便ち此の如し。蓋し彼の澹なる者は凡客に澹にして、熱き者は情人に熱し。

③異味便是無味處無味真有味然得味真味者幾人
異味は便ち是れ無味なる處、無味は真に味有り。然るに真味を味わ
い得たる者は、幾人なるや。

○厦屋Ⅱ厦は厦の俗字で家。大きな家。○輕佻浮華Ⅱ佻はかるい。
浮華はうわべばかり華美で實のないこと。輕佻浮薄に同じ。落ち着
きがなく、上滑りなこと。○標置Ⅱ品格を掲げ、地位身分を定める。
○生客Ⅱ初めての客。○傲睨Ⅱゴウゲイ。傲はあなどる。おごる。
尊大で不正なさま。威張つてにらみつける。○泊澹Ⅱ澹泊。心があつ
さりして、無欲なさま。○異味Ⅱごちそう。○無味Ⅱ淡泊。おもし
ろみがない。

現代語訳

①金持ちの家に育った女性は、かえって輕佻浮薄で、まるで芸者の
ような者がいる。お徳のような身持ちのよい芸者の前では、恥じ入
るばかりであろう。ところが芸者の分際で、お高くとまって、初め
ての客に対し態度が大きい手合いがいるが、こちらから願ひ下げだ。
こういう芸者には、出会わないことにしくはない。
②さっぱりして、お世辞もないような芸者は、こんなものだが、し
かし、淡白な芸者というのは、どうでもよい客の時には、さっぱり
しているけれど、情人に対しては、熱いものだ。
③御馳走が並んでも、どうということはないが、淡白なものにこそ、
本当の味わいがあるものだ。それにしても、そういう味わい方が出

来る人は、ほとんどいないであろう。

鳥次(新橋)

新橋の南北、絃歌に巧なる者は、僅々三五名のみ。而して鳥次、其
の一に居る。其の絃を鼓し、曲を奏す、往々新手段を出だす。尋常
の声調と同じからず。聴く者、妙と呼ぶ。鳥次の父、画を以て業と
為す。年、既に耳順。鳥次、善く之に事ふ。曲中、皆な其の孝を称す。
然れども、人、或は云ふ。鳥次も亦た色界の迷鬼たるを免れず。目
して謹嚴となす者、恐らくは皮相の見のみと。其れ或は然らん。頃日、
其の小妹をして名を教坊に掲げしめ、花吉と号す。亦た善く售ると
云ふ。

想他當日壓秋娘

想ふ 他の当日 秋娘を圧すを

鐵騎銀瓶一曲長

鐵騎 銀瓶 一曲長し

聽得香山鬢應白

聽き得て 香山 鬢 応に白かるべし

江心秋月古潯陽

江心の秋月 古潯陽

評に云ふ。父子、相親しみ、夫婦、相愛す。情の自然に出ずる者な
り。苟しくも父に孝なる、豈に男子に情ならざる者有らん。若し夫れ、
浮萍斷梗うきわたぎ 放蕩して常無きもの、其の父母に於ける、啻に路人のみ
ならず、焉んぞ其の能く男子に情あるを望まんや。未だ必ずしも一
妓に苛求せざるなり。

○新橋の南北Ⅱ新橋の花街は、現在の銀座八丁目に安政年間に開か

れたが、これが金春新道で、北側になる。後に現在の烏森のあたりに新橋南地が始る。○耳順〓六十歳のこと。○秋娘〓唐代の謝秋娘・杜秋娘という美人の名。転じて、美人。この詩は、「溇陽江頭夜送客」で始る、白居易の長詩『琵琶行』を踏まえている。起句は「粧成每被秋娘妬」。妓女が朋輩の妬みを買う。○鉄騎〓精銳な騎兵。○銀瓶〓銀製のかめ。承句は「銀瓶乍破水漿迸 鉄騎突出刀槍鳴」。琵琶の曲調の表現。○香山〓白居易がいた地名。香山居士と自称した。○江心〓川の真ん中。結句は「唯見江心秋月白」。○浮萍〓うきくさ。○断梗〓根を切られたらば。ふらふらして定まらない。○路人〓道行く人。赤の他人。

現代語訳

鳥次(新橋)

新橋の花街で、音曲に關^たっている芸者は、数えるほどしかない。となると、鳥次はその筆頭に挙げてよい。三味線の弾き方にも、しばしば新しい工夫をする。それは、通常の調子とは違い、聴いた人たちは、たいへん結構という。鳥次の父親は、絵描きであるが、歳はもう六十になる。鳥次は、父親を大事にするから、新橋の中では、皆が親孝行をほめる。しかし、人は鳥次として色欲の世界から逃げるわけには行かないという。見た目で身持ちがよいというのは、どうだろう、上辺だけのことだ、という。あるいはそうなのかも知れない。近頃、鳥次の妹がお披露目して、花吉という名で出ているが、これもまた、よく、売れてるらしい。

想いおこせば、あの頃、私は妓女仲間に抜きんでいた
琵琶を奏でれば、銀瓶が破れ、鉄騎が蹂躪するがごとく曲調が
つづき

それを聴いておられた白居易の鬢には白いものが目立ち

溇陽江の川面には秋の月が、皓々と光輝いていた

評に云う。父親とその子が親しみ合い、夫婦が互いに愛するのは、人の情で、自然にそうなるのだ。いやしくも父親に孝を尽しているならば、男に情を示さない女などいまいであろう。もし浮気性でいつも淫蕩な者(芸者)は、父母に対しても道行く人に対するように、つれないだけでなく、どうして男に対しても情を示すことを望めようか。だからといって、こういう芸者を責め立てているわけではない。

頭評

①新曲與畫法自然照應天下何處無文章獨欠漁史拈出耳

新曲は画法と自然に照応す。天下、何くの處にか文章無からんや。独り漁史の拈出するを欠くのみ。

○拈出〓字句を考え出す。

現代語訳

①新曲は画法と自然に照応している。この世のどこにも文章が無いなどということがあろうか。漁史のような文章表現が欠けているだけである。

【第七十二号】

玉八(新橋)

「婉たり變たり。総角卯たり。未だ幾ならずして見れば。突として弁ず」。余、今、玉八の為に斯の詩を三復す。薩賊平ぐの年、余、某先生と、太田楼に飲む。坐に一雛妓有り。纖弱、幾んど衣に禁へず。而して善く鼓を搗つ。其の函を問ふ。曰く十二。其の名を問ふ。曰く玉八。今茲二月某日、旧友の宴会に赴く。一妓の麗秀なる者有り。觴を捧げて進む。これを顧れば則ち玉八なり。而して紅裙翠鬢、儼然たる良校書なり。余、駭嘆これを久しうす。吁、卵雛、化して彩鸞と為り、毛羽燦然、人をして刮目、暇あらざらしむることは是の如し。余の髪、早晚雪を梳るも、亦た知るべきなり。頃日、玉八、鬢上の金釵、紅珊瑚を挿む。大きき、鳩卵の如し。蓋し頭官某公の賜ふ所と云ふ。果して然りや否や。

鶴鶴原上冷秋風

鶴鶴

原上 秋風冷なり

不似香閨春意通

似ず 香閨

春意の通ずるに

誰識城山劍頭血

誰か識らん 城山 劍頭の血

化成娘子玉鈿紅

化して 娘子 玉鈿の紅を成す

評に云ふ。紫史、若紫の一篇を以て、名を後世に得たり。漁史、此の篇、僕、以て情譜中の圧巻と為す。情譜、目して玉史と為すも亦、可なり。又た云ふ。僕、頃ろ、玉妓を稠人中に寓目するを得たり。初め、其の誰なるを知らず。諦観これを久しうして、神彩溢れ出づ。漁史、余に告げて曰く、是れ即ち是れなり。而して後、漁史の筆、謬らざ

るを知る。

○「婉たり變たり……」○「詩經」齊風「甫田」が出典。○變りみめよい。美しい。○総角||あげまき。頭の両脇に髪を集め、角のかたち結んだもので、少年・少女の結髪。転じて元服前の小児。総卯。卯もあげまき。○弁||冠。冠をかぶる人。○今||明治十四年頃。○薩賊平||西南戦争が終結したこと。明治十年。○儼然||おごそかで、いかめしいさま。○金釵||金のかんざし。○頭官||地位の高い官職。○鶴鶴||セキレイ。水辺に住む小鳥。鶴鶴原上は、「詩經」小雅常棣「鶴鶴在原 兄弟急難」。○香閨||女性の部屋。○春意||春ののどかな心持。○劍頭||劍の切っ先。○城山||西南戦争で薩軍が立てこもった鹿児島市郊外の山。○玉鈿||玉のかんざし。○稠人||多くの人。○神彩||精神と風采。気高い顔立ち。優れた姿。○紫史||源氏物語の異称。

現代語訳

玉八(新橋)

「たおやかで、器量よし。まだあげまきだったのに、いくらか経たないうちに見かけたら、にわか冠をかぶる歳になっていた」。私は今、玉八のために、この詩を三たび口ずさんだ。西南の役がおさまった年、私は、ある御仁と太田楼で一献かたむけた。と、その座敷に一人の半玉がいた。見るからにひ弱そうで、着物の重さに耐えかねているありさま。なのに、鼓を打たせるとなかなかのものであつ

た。歳を聞くと十二といい、名前を聞くと玉八と答えた。今年の二月のある日、古い友人の宴席に、人目を引くような美妓がいた。その芸者が盃をもって側に来たので、よく見ると、何と玉八ではないか。着物の姿から髪の色しらえまで、一分の隙もない芸者になっていた。私は、驚いたのなんの、開いた口がふさがらなかつた。あの雛鳥が、なんとまあ、目をあざむくかのような鳳に化けよつた。きらめくようななり格好で、客の目を釘付けにしている。時の流れとはこういうことで、私の髪の毛もその内、白くなってしまふのさう。ついこの間のこと、玉八の髪に金のかんざしと、赤い珊瑚が挿してあつたが、珊瑚の大きさといつたら、鳩の卵ほどもあつた。どうやら、さる高官のくだされものなのさうだが、嘘か本当か分らない。

兄弟が急難を救い合つた鶴鶴原の上には、秋風の冷気が漂つている

それにひきかえ、女の部屋には春ののどかな気分のみちている

城山の戦いの剣先の血が

今や女のかんざしの珊瑚の紅に化したなどということを知者が知らうか

評に云う。源氏物語は若紫の一篇で後世に名を残した。柳北君の作もまた、この玉八の篇が、新柳情譜の中では最高の出来栄であり、情譜というよりも、玉史といつてもよいくらいのものだ。

もうひとつ言わせてもらえば、私はついこの間、人が出入りしているなかで玉八を見かけたのだが、名前が出てこなかつた。しばらく

じつと見ていたが、美しさが溢れ出ているようだった。すると、柳北君が、あれはね、玉八だよと教えてくれた。このことから、柳北君のこの文章には嘘偽りがないということを知つた。

頭評

①起法何等妙絶如褰簾見美人

起法、何等の妙絶。簾を褰あげて美人を見るが如し。

②如滅如没諷意婉約筆端極有風神

滅するが如く、没するが如し。諷意、婉約にして、筆端、極めて風神有り。

③羽翼既成飛瞰人後來許多日月抹倒多少英雄豪傑蕩盡幾箇鐵心石腸可畏可懼

羽翼、既に成り、飛びて人を瞰くふ。後來許多の日月に多少の英雄豪傑を抹倒し、幾箇の鉄心石腸を蕩あげせん。

④萬金一擲不足惜何況一顆么麼片玉不過費此人半月俸

萬金、一擲すること、惜しむに足らず。何ぞ況んや一顆ようび么麼の片玉、此の人の半月の俸を費やすに過ぎざるをや。

⑤四字自謂評得當

四字、自ら評の當を得たるを謂ふ。

○起法文章の起こし方。○褰簾ケンレン。簾を巻き上げる。褰はかかける。はかま。○諷意思っていることを遠回りに言う。○

婉約〓しとやかで控え目なこと。○風神〓趣。気品。人品。○噉〓食う。食らう。○石腸〓堅くて容易に動かない心。○么麼〓こまかい。

現代語訳

①文章の書き方の、何と傑出していることか。あたかも、簾を巻き上げた美人に遭遇したようなもの。

②滅するが如く、没するが如し。言いたいことはそれとなく、控え目ながら、文章には品格があつて、人柄がしのばれる。

③あの雛鳥も、羽が生えそろうい、今や座敷を飛び回つて客の心をつかんでいる。このままで行つたら、何人の英雄豪傑をものともせず、何人の意思のしつかりした大丈夫のこころを蕩たうかすことであろう。

④大金を支払つたところで、何の惜しむことがある。たかが一個のちつぽけな宝玉だ。高官にとつては、半月分の給料でしかすぎない。

⑤神彩溢出とは、まことに当を得た評である。

福助 (新橋)

①玉八既に巍然ゑいぜんとして一大家を成す。これに継でけいぞう称する者は、福助なり。福助、小鬢しょうん、固もとより未だ譜すべからず。而してこれを譜す。蓋し見る所有るなり。斯の子、幼稚にして才芸ある、諸もろれを玉八に比すれば、過ぐる有りて、及ばざる靡なし。其の宴席に在る、鼓を打ち、絃を弄し、舞踏まげん、一も能はざる無し。而して賓客に接する、亦た婉言諧語、応対、流るるが如く、老妓をして後に陞しやうじやく若たらしむ。余、窃かに謂ふ。阿福をして年紀二八に至らしめば、則ち新橋百名の校書

恐らくは顔色無からん。若し信ぜざる者有らば、試みに一たびこれを聘せよ。当に余の私評に非ざるを知るべし。

梅蕾まゐ纒ま含半點紅 梅蕾 纒まに含む 半点の紅

奇香早已動霜風 奇香 早く已に 霜風に動く

他年爛熳成春日 他年 爛熳 春を成すの日

儂是花前白髮翁 儂わは是れ 花前の白髮翁

評に云ふ。梨花海棠、古人、既に其の例有り。白髮翁、豈に軽んずべけんや。漁史、筆、靈にして、舌、慧。新柳二橋の校書、呉仲子の為に終身、險う靡を捧ぐるを願はざる者なし。鬢びんしぜん絲せん禪ぜん榻た 自ら一段

の風流情景有る、亦た未だ知るべからず。吾、將に他日を俟ちて其の言を証せんとす。請ふ、此の評を以て、息壤そんじやくと為せ。

○巍然ゑいぜん山の大きく高いさま。人物がひとときわ優れているさま。○風雛ふうしよ優れた子供。○小鬢しょうん子娘。半玉。○譜ふしするす。○拇戦もせん狐拳などの遊戯の拳。○陞しやう若じやく陞乎に同じ。目をおみはるさま。驚

きあきれて見つめるさま。○他年たねん後の歳。○儂わわし。わたし。○俾び使役の助辞。○呉仲子ごちゆうし未詳。○險う靡ま墨のこと。○鬢びん糸いと白くなつて乱れたびんの毛。○禪榻ぜんた坐ざ禪ぜんを組み腰掛け。杜牧の「題

禪院」の転句「今日鬢絲禪榻畔」を踏まえており、老後の閑寂、青春を悼むの意。○息壤そんじやく固い誓い。戦国時代の秦の武王が、息壤そんじやく今の湖北省江陵県の南の地)で讒言を信じないことを甘茂と誓つた故事。

現代語訳

福助（新橋）

玉八は、新橋ではひととき優れた芸者だが、これに継ぐ有望株は、まだ小娘ながら、福助をあげたい。福助は半玉だから、わざわざ書き記すこともないのだが、それでも書いておきたいのは、見所があるからなのだ。何故かという、まだ子供なのに、芸は一人前なのだ。玉八と比べても、それを上回る芸を見せることがあっても、それより以下ということがないのだ。宴席に出れば、鼓を打ち、三味線を弾き、踊りが出来て、拳^{けん}までこなすという具合で、何でも出来るのだ。上客の相手をして、しとやかな物言いで、ときには笑いを誘う。応対も出来、臨機応変の客あしらいで、年増の芸者があきれかえって、言葉もないくらい。それで、口には出さないけれど、私からすれば、お福が十六の歳にでもなれば、新橋の百人を数える芸者連中も太刀打ち出来ないであろう。うそだと思ふなら、一度、座敷に呼んでみなさい。そうすれば、私の言うことが私評でないと、お分りになるでしょう。

梅の蕾にほんの少しだが紅色が出てきた

得もいわれぬ香りが霜の降りた寒風のなか、早くも漂ってくる

年が明けて春になれば蕾が満開になるように、いつの日かこの

福助も抜きんでた芸者になるであろう

そのとき私が福助の前にいるとしたら、すっかり白髪頭のお爺さんになっている

評に云う。先人には（美女を）梨の花や海棠にたとえた作例がある。白髪の翁を軽く見てはいけない。柳北君の文章は、靈妙にして、語り口が垢抜けている。新橋・柳橋の芸者連中は、呉仲子云云（訳出不能）。歳をとって、色気抜きの翁になっても、まだまだ色っぽい話にふれることもある。そうした心境には遠く及ばないが、いつの日にかは、そうした心境を味わってみたいものだ。こう言ったからには、きつとそうなつて見せたいものだ。

頭評

①連牽而書極有法度雖為二篇合為一篇合傳體變而妙者

連牽して書するに極めて法度有り。二篇を為して合せて一篇と為すと雖も、合伝の体、変じて妙なる者なり。

②漁史為掲一商票此妓自今聘招定無虚日吾知此

漁史、為に一商票を掲ぐ。此の妓、自今聘招定めて虚日無からん。吾、これを知る。

③妓之家奉漁史肖像號為福德神矣

妓の家、漁史の肖像を奉り、号づけて福德神と為す。

○連牽Ⅱ連続。○法度Ⅱ手本。物の基準。○商票Ⅱ商標か。○聘招

Ⅱ招聘。○虚日Ⅱ何もしない日。

現代語訳

①前話と連続して書くにも、ちゃんと書き方がある。二篇を合せて

一篇にしているが、合伝の文体を変化させて、巧みなものになって
いる。

② 柳北君は、いわば（福助のために）看板を掲げたようなもので、
福助はお座敷に声がかからない日はないであろう。私はそれを知っ
ている。

③ 福助の家では、柳北君の肖像をお祀りし、福德神として崇めている。

粟告

情譜新橋歌妓ヲ譜スル既二十二名次號ヨリ轉ジテ柳橋十二名ヲ録シ
併テ二十四名之ヲ初編トナシ餘ハ二編に譲ル

お知らせ

『新柳情譜』では新橋の芸者を十二名紹介しましたが、次号からは
場所を変えまして、柳橋の十二名を記し、新橋と合せて二十四名を
もって初編といたします。紹介しきれない者は、二編に載せませす。

【第七十三号】

阿園（柳橋）

阿園、原^{もと}の名、阿里。森元楼主^{むすめ}の女なり。少時、絶美の名、都内に鳴る。
柳橋の名妓、阿金、阿栄のごとき者、亦た為に一步を譲ると云ふ。
出羽の豪商秋田某、千金を擲^{なげ}ち、これを娶^{めと}る。伉儷^{こうれい}情密、未だ幾^{いくばく}な
らずして、故有りて鏡破る。園の籍を妓団に掲ぐる、蓋し遅暮^{いそぐ}に属
す。然れども嬌姿麗貌、猶ほ柳橋に冠たり。赤幟^{せきしほ}を粉墨^{こなぶ}に豎^たつ、爾

來十星霜。名声未だ衰へず。女中の馬伏波と謂ふべし。園、財に富み、
屢^{しばしば}は貧人に振恤^{しんじゆつ}す。嘗て官の為に賞賜せらる。然れども性、善く嘖^いり、
善く罵り、嬌舌、刃のごとく、豪士論客と雖も、亦た辟易せざる無し。
園、毎に余を罵りて、糸瓜翁と曰ふ。余の面長く、糸瓜に肖^にたるを
以てなり。其の、人を罵るの妙、概ね是の如し。

月旦^{げつたん}如今苦定評 月旦 如今 定評に苦しむ

多情却怪似無情 多情 却つて怪しむ 無情に似たるを

園林霜後春狼藉 園林 霜後 春 狼藉

笑殺狂花不負名 笑殺す 狂花の名に負かざるを

評に云ふ。徐娘、老と雖も、猶ほ風情有。風月情中、従来半老佳
人を厭はざるなり。此の篇、奇趣、罵字より生出す。嬌^{きょう}瞋^{しん}、却
つて有情才子をして、断腸消魂せしむ。蓋し漁史、多少の実境を経
歷し、纔に能く此等の文章有り。覽者、草々看過すべからず。

○ 伉儷^{こうれい} 〓 つれあい。夫婦。伉はたぐい。つれあい。儷も同じ。○ 鏡

破^{やぶ} 〓 破談する。○ 遲暮^{ちぼ} 〓 晩年。老年。○ 赤幟^{せきしほ} 〓 赤い幟。○ 粉墨^{こなぶ} 〓 花

街をさすか。○ 馬伏波^{まふくは} 〓 後漢の伏波將軍、馬援のこと。光武帝によつ

て「嬰^{えい}鏖^{あう}たるかなこの翁」と称された。○ 振恤^{しんじゆつ} 〓 ほどこし、すくう。

○ 月旦^{げつたん} 〓 人物評。○ 如今^{こんごう} 〓 いま。ただいま。○ 徐娘^{じょにやう} 〓 半老徐娘。中年増。

○ 生出^{しんじゆつ} 〓 生れる。○ 嬌瞋^{きょうしん} 〓 美女のいかり。あだを含んだいかり。○ 草々

〓 にわかで、慌ただしいさま。

現代語訳

お園(柳橋)

お園の前の名は、お里で、森元楼主人の娘である。幼少の頃より、美少女のほまれが東京中に知られていた。柳橋の名妓、お金やお茶ほどの者でも、お園には一目置いたといわれている。出羽の豪商の秋田某が、多額の金を投じて、身請けしたのだが、夫婦仲がうまくいっていたのは、ほんのつかの間で、何かがあつて離縁した。園は花街にお披露目したのだが、そのころは、すでにいい年増であつた。

しかし、その艶やかな容姿は、相変わらず柳橋きつての美貌であつた。その麗名をかかげて十数年、いまだに名声を維持している。女の馬伏波といつてもさしつかえない。園には財力があつて、貧しい人たちに、絶え間なく施しをしている。前にその善行によりお上から褒美をもらっている。ところが、園は生れつき口の悪いところがあつて、怒らせたりしようものならその口舌は切れ味鋭く、名士や論客でも降参させてしまう。園はいつも私をつかまえては、へちま爺とからかう。私の顔が面長で、糸瓜に似ているからだ。そういうわけで、園の悪口が言い得て妙なのは、おおむねこんなところにある。

人物評というものには、今にして定評なるものがあるのかしら多情であると評しても実は無情であつたりする

庭の木々には霜が降りているのに(お園は年老いているのに)若いときのように狼藉のくらしをしている

狂い咲きとはよくいったものと大笑いする

評に云う。お園は、中年増とはいへ、いまだに容色は衰えない。花

街においては、これまでも中年増の妓女をかやの外におくような事はしていない。この回の文章の面白さは、罵の字を用いることで、生れたようなものだ。美人の怒りの表情というものは、かえつて有情才子の客の心をとろけさせるようなところがある。したがつて、柳北君には、これに近い経験があつたからこそ、多少なりともこうした文章が書けたのであろう。読者は、こういう点をおろそかにして見逃してはいけない。

頭評

① 諸葛謹面似驢歐陽詢面似猴而桑維翰則面長尺餘皆一世俊傑園之罵漁史非罵也譽也以罵為譽以誹謗為標榜真哉名妓之稱也

① 諸葛謹の面は驢に似る。歐陽詢の面は猴に似る。而るに桑維翰は則ち面の長さ尺に余る。皆、一世の俊傑なり。園の漁史を罵るは、罵るにあらず、誉むるなり。罵を以て誉と為し、誹謗を以て標榜と為すは、真なるかな。名妓の称有るなり。

○ 諸葛謹 後漢末から三国時代にかけての呉の武将・政治家。蜀の軍師・諸葛亮の兄。○ 驢 驢馬。○ 歐陽詢 初唐の書家。○ 桑維翰 中国五代後晋の政治家。○ 標榜 人を褒めたたえること。

現代語訳

① 諸葛謹の顔は驢馬に似ていた。欧陽詢の顔は猿に似ていた。そして桑維翰の顔の長さは一尺余りあつたという。この三人は、皆、世に優れた傑物であつた。お園が漁史を罵つたのは、罵りではない。

むしろ褒めたのである。誹謗しているようで、かえつて褒め称えたのである。真の名妓とは、そういうことが出来るものなのだ。

幸吉(柳橋)

余、幸吉を識る、既に十裘葛きんぎょかつら。而して、未だ嘗て其の醜声を聞かず。嗚呼、幸吉も亦た狹斜の女なり。豈に風懷無からんや。而して人をして其の形迹を認めざらしむる者は、則ち其の謹嚴慧巧の致す所に非ずや。庚辛未末の際、余の旧友、争ひて柳橋に遊ぶ。幸吉に簪かんざしたる者、頗る多し。皆、志を遂げずして止む。其の善く一を守りて渝らざる、知るべきなり。顧おもふに、柳橋の妓、老と無く、少と無く、各一盛一衰、時に転変有り。独り幸吉、終始替らず。其の声価、十年一日の如し。故有るかな。或は目するに、妓中の馮道ふうどうを以てする者有り。然れども、幸吉、善く人と交はり、久しくして之を敬す。目して妓中の晏嬰あんえいと曰ふ、則ち可なり。之を長樂老に比すれば、未だ確評と為すべからず。且つ、其の技芸を評するも、亦た上等に在り。嗚呼、南北綺羅の叢、能く斯の人と、相匹する者、果して幾人有る。

亭亭獨立水之隈 亭亭 獨立す 水の隈

借問周郎何處來 借問しやもんす 周郎 何の處より來る

好是清漣塵不染 好し 是れ清漣 塵染めず

白蓮一朶月中開 白蓮 一朶 月中に開く

評に云ふ。溫柔貞靜、妓中、人有りと謂ふべし。然れども、余、窈かに恠あやしむ、守節、式無し。何ぞ早く苦海を脱し、従良、以て終へ

ざる。顧ふに、乃ち色を衒ひ、伎を售り、徒に少年輩をして苦惱せしむ。吾れ恐る、美人玉碎の後、生を転じて醜黒男子となり、多少、婦人の為に播弄せらるるを。

○裘葛きんぎょかつら 冬に着る皮衣と、夏に着るかたびら。転じて、寒暑の移り変わり。一年。○醜声しゆうせい 醜い評判。醜聞。○風懷ふうわい 風流な思い。風情。色事。○庚辛未末こうしんみま 庚午は明治三年(一八七〇)、辛未は明治四年(一八七二)。○簪かんざし々々 恋したうさま。○渝あや かわる。○馮道ふうどう 中国・五代の政治家。四朝の十人の君主に仕え、種々の高い官職に就き、二十年間、宰相の座にあつた。○晏嬰あんえい 春秋時代の齊の宰相。管仲とともに、名臣と称せられる。○長樂老ちやうらくらう 馮道の号。晩年、自らの功績をぬけぬけと語つたという。○亭亭ていせい 高く聳え立つさま。○周郎しゅうらう 三国時代、呉の孫権の武将。美男子であつた。○一朶いつた 一本の枝。○苦海くかい 苦界。苦しみの多い世の中。遊女などの境遇。○従良じゆらう 妓女が身請けされて、結婚すること。○播弄はくどう 翻弄に同じ。もてあそぶ。

現代語訳

幸吉(柳橋)

私が幸吉を知つてから、もう十年になるが、一度も身のまわりの醜聞を聞いたことがない。とは言え、幸吉として花街の女だから、色恋沙汰があるのは当然だ。ところが、そうした浮いた話の形跡がちつとも出てこない。幸吉の真面目さと頭の良さが、そうさせるのであるまいか。明治の三年から四年にかけて、悪友たちは、競うよう

に柳橋に出遊したのだが、その多くの者が、幸吉に入れ込んでいたようである。残念ながら、想いを遂げた者は一人もいなかった。幸吉が一人の男を守ったということだろう。考えてみれば、柳橋の芸者にも、老若にかかわらず盛衰はあるもので、時に境遇が変ることもある。幸吉だけが、十年経つても評判が変らないのは、もつともなのである。なかには、幸吉を芸者仲間の馮道になぞらえる者までいる。それでいて、幸吉は人付き合いもよく、相手に花をもたせる気遣いがあり、少しも傲慢な態度がない。だから、芸者連中の晏嬰と言つてもさしつかえあるまい。しかし、幸吉を馮道になぞらえることと比較すれば、まだ確評とは言えないかもしれない。付け加えるなら、幸吉の芸事も最上のものであり、綺羅星のごとき柳橋の芸者連の中で、幸吉に肩を並べられる者が、果して何人いるかしら。

岸辺に亭亭と独り立っている

お尋ねする、美男の客はいずこから来るのか

あたかもよし、清らかな漣には塵芥もなく

白い蓮の花が月光を浴びて開きかけている

評に云う。性格が温厚で、操正しく物静か、芸者の中にもそんな女はいる。しかし、最後まで節を貫ける者は、二人とはいるまい。早いと芸者稼業から足を洗い、身請けされて世帯を持つことが、どうして出来ないであろう。考えて見れば、色気をこれ見よがしにし、芸事を売り物にし、若い男を手玉にとっているのだ。そうした女が死んだ後に生まれ変わって、色黒の醜男になって、多くの婦人にも

てあそばされるようになることを、恐れる。

頭評

①其慧巧或有之謹嚴則僕不保證之也

其の慧巧は或はこれ有り。謹嚴は則ち僕これを保証せざるなり。

現代語訳

①幸吉が利口だというのは或はそうであろうが、謹嚴さについては、僕はそれを保証しない。

【第七十四号】

阿浜（柳橋）

①東京の教坊中、妙年殊色の妓を算する者有れば、必ず先づ指を二人に僂す。一は則ち芳街の阿奴にして、一は則ち阿浜なり。浜、素より何人の女為るを知らず。嘗て柳橋蝦屋の姫の仮女と為る。春吉に於ては義妹為り。春吉、既に従良す。浜の名、遽に東京に播く。独り曲中のみならざるなり。浜、二八より脂粉を喜ばず、淡粧薄抹、容姿楚々たるのみ。而して其の明眸嬌靨、一顧、座を照らす。観者、食指頓に動く。故に貴顕・富豪、聘招虚日無く、纏頭、鉅万を累ぬ。然れども、浜、天質磊落、毎に挑達の遊を好む。余、窃かに恐る、斯の子の末路、金屋の栄を享けずして、竟に当墟の人と為るを。

天香国色是花王 天香 国色 是れ 花王

一朵春風庄洛陽 一朵の春風 洛陽を庄す

却笑痴情辜富貴 却つて笑ふ 痴情の富貴に辜そき

断雲零雨任他狂 断雲 零雨 他の狂に任ずる

評に云ふ。聞く、往昔おとせき、妓、地獄と云ふ有り。容姿才情、並に一世を動かす。自ら謂ふ、「盛者必衰の理、吾が一身に寓す。以て少年輩を警いましむべし」と。歿に臨んで遺言す。「骸骨を野に暴露し、遊蕩者をして、之を觀せしむれば、惨然として色動き、始めて美色の恃たむべからざるを悟らしむる」と。浜兎、放蕩自ら檢束せず。意も亦た謂ふ、「二たび狹斜に誤れば、仮た使しひ自ら戒しむるも、以て清淨の身と為るに足らず。若かず、遊蜂飛蝶、以て一世を戲弄し、現身說法するに」と。寓意、浅しきに匪あず。嗚呼、亦た達なるかな。

○妙年ニ年が若いこと。妙齡。○殊色ニとりわけ優れた容色。美人。
○儂ニ指をまげる。○芳街ニ日本橋芳町にあつた花街。○播ニしく。
○曲中ニ曲輪の中か。ここでは、花街をさす。○楚々
○清らかで美しい女性の姿。○嬌靨ニ靨はえくぼ。愛きようのある
○纏頭ニテントウ。祝儀。花。○鉅万ニ巨万。○挑達ニ輕薄なさま。
○金屋ニ輝くばかりの御殿。○当墟ニ酒屋の店番をする。墟は酒甕
を置く土間のくぼみ。○天香国色ニ国色天香。牡丹の色、香の優れて
いる形容。○花王ニ牡丹の異称。○辜ニコ。つみ。そむく。○断雲
零雨ニその場だけの色事。○地獄ニ私娼。○檢束ニ心をひきしめ、
行ないをつつしんでじぶんじしんを取りしまる。○匪ニあらず。

現代語訳

お浜(柳橋)

東京の数ある花街のなかで、若くて飛び抜けた容色を誇つた芸者を数えあげるとするならば、必ずや、二人の名があがるであろう。一人は、芳町のお奴、もう一人は言うまでもなく、お浜である。もともと浜が誰の娘なのかは分からないが、以前は、柳橋の蝦屋のお内儀の養女であつた。春吉にとつては義妹になる。春吉はすでに結婚して世帯をもっているのだから、今や浜の名は急速に東京中にひろまつたが、決して花街の中だけではなかつた。お浜は、十六歳の頃から、厚化粧を好まず、さつと紅を入れ、白粉はうすらすと、すつきりとした江戸前の美人であつた。そのつづらな瞳とえくぼの愛嬌たつぷりに、振り返つただけで座がばあつと明るくなつたものだ。その場に居合わせた客たちは、お浜をものにしようと、大騒ぎ。そういう具合だから、高官や富豪のご指名で、身体の空く日もなく、ご祝儀だけで大変な額に登つたという。ところが、お浜は生まれつきおおらかというか、考えもなく、くだらないことに金を使うところがあつて、私は心配している。お浜の末路は、お屋敷住いの出世というより、下手をすると、酒屋の店番に成り下がるかもしれないので。

その香りと鮮やかな色彩で、花の王と呼ばれる牡丹

その牡丹のような美人は、都のすみずみまで知れ渡る

そのあふれるような色香で、玉の輿に乘ろうとはせず

居所も定まらず、くだらない遊びにうつつを抜かすとは

評に云う。はるかな昔、地獄と呼ばれる娼妓がいた。容姿才情、ともに一世を動かした。自ら言うには、「盛者必衰のことわりは、私の一身にそなわっている。だから、自分を見れば、若輩者の戒めともなるであろう」と。そういう女が、臨終に及んで遺言した。「自分の亡骸は野山にさらして、放蕩する連中に見せてやれ、そうすれば彼らは気が滅入って顔色を変え、美貌などというものは、一時のもので、何の役にも立たないことを、悟るであろう」と。お浜も遊び癖を直そうとはしないし、心の中で思うには、「一度、苦界に身を沈めたら、自分を律したところで、きれいな身体になるわけではない。だから、蜂や蝶のように勝手に生きて、面白可笑しく世の中をはずすつかいに眺めて、どこが悪い、生身で説法するのが一番だ」と。その真意は決して浅いものではない。それはそれで、十分理屈が通っている。

頭評

①堂々の陣整々の旗
堂々の陣、整々の旗

②文亦清楚可愛妙稱其人品漁史之筆依物賦形眞仙筆也哉
文も亦、清楚。愛すべく、妙なること其の人品を称す。漁史の筆、物に依り、形に賦す。眞の仙筆ならんや。

現代語訳

①堂々とした陣形、きちんと整った旗指し物。
②文も亦た清楚にして愛すべきものがある。妙なる点は、その人品

を称していることである。漁史の筆は、物に依って形を表現する。眞の仙筆であるなあ。

阿元(柳橋)

①柳橋、古来、専ら声価を占むる者、皆な本地の妓なり。他方より来る者のごときは、甘んじて第二流に居らざるを得ず。独り、阿元、北里より籍を此に移して、声譽、衆を圧す。蓋し罕れに見る所なり。現今、柳橋中、色芸双然にして、侍宴に嫺る、者を求むれば、先づ元を推す。元、資性、黠ならず、痴ならず。粧飾、濃ならず、淡ならず。皆、其の宜しきを得たり。余、毎に賓客を会する毎に、妓を召し、酒を侑むれば、必ず首に元を選ぶ。余の愛する所、固より元に過ぐる者有り。然れども虚心、これを評すれば、則ち斯の妓を推さざるを得ず。其の善く嫺る、を以てなり。而して其の善く酒を飲み、肉を啖ふも、亦た健兒をして、三舎を避けしむ。余、聞く、古の謂ふ所の名妓、百も能くせざる所無しと。元、其れ庶幾いか。

來從北地玉花驄 北地より来る 玉花驄

一洗二州凡馬空 二州の凡馬を 一洗して空し

文苑今無將軍筆 文苑 今 將軍の筆無し

誰描駿骨立長風 誰か描かん 駿骨の長風に立つを

評に云ふ。聞く、古、小栗判官なる者有り。善く悍馬を馭す。一たび鞍に跨がれば、則ち蹀躞の性、変じて馴良と為り、殆ど猫の如く然り。嗚呼、今日、誰か風流場中の判官為る者ぞ。能く斯の駿をして、

跨下に屈せしむ。

○本地Ⅱこの土地。当地。○北里Ⅱ吉原のこと。○嫺Ⅱ嫺と同意。なれる。熟達している。○黠Ⅱさとい。わるがしこい。○避三舎Ⅱ三舎は古代中国で、軍隊の三日分の行程、したがって、軍隊が三日分の行程を退く。転じて、相手をはばかり、自分から退く。○庶幾Ⅱ近い。○驄Ⅱあしげの馬。玉花驄は唐の玄宗の名馬の名。この詩は、杜甫の古詩「丹青引贈曹將軍」を踏まえている。起句「先帝天馬玉花驄」。承句「一洗万古凡馬空」。転句「將軍下筆開生面」。結句「迴立閭闔生長風」。○躑躅Ⅱ馬などが、ひづめでけり、齒で噛む。○小栗判官Ⅱ中世の伝説上の人物。説教節によって流布され、浄瑠璃、歌舞伎にも翻案された。

現代語訳

お元(柳橋)

柳橋では、昔からもつばら名声を占めてきた芸者は、土地っ子であった。他所の花街から来た者は、二流とみなされて、がまんするしかなかつた。ところが、お元だけは、吉原から柳橋に移ってきたのに、他を押しつけて、君臨している。まったくのところ、滅多にないことである。今の柳橋で、容貌と芸事の両方が秀で、座持ちのうちまい芸者となれば、何をおいても、お元であろう。お元の良いところは、性質に悪がしこいところがなく、愚かでもなく、お化粧の仕方も、濃過ぎず、薄過ぎずで、何にしても程合が良いのだ。私は

宴席に客を招くたびに、芸者を呼び、酒をつがせるときには、何はさておき、お元を指名する。私が眞原にする芸者は、お元をしのぐようなのが、他にもいないことはないが、冷静に考えれば、お元をおいて他にはないのだ。客あしらいが上手いのでね。お元の酒をよく飲み、肉も平気で喰らうところは、丈夫な男をしのぐほどである。聞くところでは、昔の名妓と言われた芸者というのは、何でもよくできたそうだが、お元もそれに近いところがあるのだろうか。

北方(北里) から将来された名馬、玉花驄(お元)

二州(柳橋の南北)の凡馬(芸者)を一洗(一掃)してしまふ

文人たちには、あの名筆と称された曹將軍のような人はいない
誰が描けるのであろう、玉花驄が颯爽として宮門に立っている
さまを

評に云う。昔、小栗判官という人がいて、暴れ馬を馭することに關けていた。ひとたび鞍に跨がれば、凶暴な性質の馬も、急におとなしくなり、まるで猫のようであった。それにしても、柳橋の遊客のなかで、誰が小栗判官が馬を馭するように、お元を手中に収めることができるのであろうか。

頭評

①着筆與諸篇不同妙

着筆、諸篇と同じからざるは、妙。

②不啻飲啖之健更健於此者亦未可知也何々

ただに飲啖の健なるのみならず、更に此の者の健なるも亦た未だ知るべからざるなり。呵呵。

○着筆Ⅱ文章の書き方。

現代語訳

①この文章の書き方は、他の篇とは異色であり、面白い。

②ただ、飲み食いの健啖だけではなく、健兒（男）に対しても健康なのかどうかは、まだ知ることができない。ハッハッハ。

【第七十五号】

錦八（柳橋）

戊辰干戈の後、余、二三の幕僚と、縦酒、懷を遣り、毎に飲するに妓を徴す。識る所、数十人。而して其の今に存する者、唯だ錦八一人のみ。当時、錦八、嬌小にして奇捷。酒を飲むこと数斗、酔へば則ち放言、人を罵る。勢ひ当るべからず。余、呼んで隼姐と曰ふ。其の小にして、鋭なるを以てなり。嘗て溼の魚十楼に飲む。余、愛狗有り。尾して来る。乃ち与ふるに肉を以てす。衆犬、皆な環視衆。然れども、余を畏れて動かさず。錦八既に酔ふ。頤りて曰く。「何ぞ偏なる」と。手に盤肉を攫み、尽く衆犬に投界す。一坐皆な驚く。然れども錦八、志操も亦た人に過ぐる者有るなり。深川の豪商、美濃善、錦八に昵し、竟に購ひて小星と為す。後、善の家道漸く衰へ、其の妻妾皆な棄て去る。錦八独り去らずして曰く、「旧恩、豈に報ぜざるべけんや」と。乃ち復た籍を掲げ、技を售り、以て善を養ふ。善、

錦八に衣食する、三五年。竟に往く所を知らず。錦八、今猶ほ善く飲む。然れども、酔へば則ち大息して曰く、「妾、老ひたり。復た肉を攫んに狗に投ずるの意気無し」と。余、為に愀然たり。

一肱舊夢十餘年

樽酒相逢且黯然

縦使身非謫居客

青衫掩淚聽哀絃

一肱の旧夢 十餘年

樽酒 相逢ひて 且つ 黯然

縦使 身は謫居の客に非ざるも

青衫 涙を掩ひて 哀絃を聴く

評に云ふ。漁史、嘗て幕府の貴官為り。鞠躬盡瘁、蓋し亦た勞せり。時勢一変、官を棄てて顧みず。放浪、自ら娛しむ。而して裁抑すべからざるの氣有り。時に筆端に見る、則ち此の篇、啻に一歌妓の為に嘆きを発するのみならず。

○戊辰干戈Ⅱ慶応四年（一八六八）に始り、明治二年に終結した戊辰戦争。○縦酒Ⅱ酒を存分に飲む。○遣懷Ⅱ心の思いを述べ晴らす。○奇捷Ⅱ敏捷。すばしこい。○隼姐Ⅱハヤブサの錦八という仇名。○朶頤Ⅱあごを下げ動かす。物欲しげなさま。○盤肉Ⅱ盤は大皿。大皿に盛った肉。○投界Ⅱ界は与える。投げあたえる。○小星Ⅱ妾。そばめ。君主の妾が、自分を星屑にたとえたという「詩経」。○愀然Ⅱ愀は愁える。愁え悲しむさま。○家道Ⅱ家の貧富などの状態。くらしむき。○一肱Ⅱ肘枕をすること。○樽酒Ⅱ樽の中の酒。○黯然Ⅱ憂えるさま。○謫居Ⅱ罪を得て流されること。○青衫Ⅱ書生の着る青い着物。転じて書生。ここは倒幕後、一介の書生となった柳北

自身を指す。○鞠躬盡瘁||鞠躬は身体をかがめて謹敬を示す。盡瘁は力を尽す。一生懸命になつて心を尽し、力を尽す。○裁抑||へりくだる。

現代語訳

錦八(柳橋)

戊辰戦争が終わり、ご一新の世になつてから、私は幕臣であつた数人の同僚と痛飲し、懐旧談にふけり、毎夜、芸者を待らした。まあ、その時に呼んだ芸者は、知っているだけでも数十人はいたであらう。それが今や生き残りはと言えば、錦八ひとりだけである。その頃の錦八は、小柄で色つぼく、すばしいところがあつた。酒は斗酒なお辞せず、酔えば大声を出してわめき、罵声を浴びせ、そのありさまたるや、手の付けようがなかつた。私は、ハヤブサの錦八と仇名をつけた。小柄だが、敏捷ところがあつたからだ。その頃、隅田川沿いの魚十という料理屋に錦八を連れて行ったことがある。そのとき、私の可愛がつっていた犬がついて着たので、肉を与えたのだが、野良犬どもは肉をとりまいて、涎を垂らしているのに、私の顔色をうかがつて、食べようとしめない。それを見た錦八は、酔いにまかせて、怒りだし、「何だい、おかしいじゃないか」と皿に盛つた肉を野良犬共に抛り投げた。まわりの連中は、驚きあきれたのだが、これが、錦八の心意気の人を上回るところなのだ。深川の豪商の美濃善が、錦八にぞっこん惚れ込んで身請けし、囲い者にした。その後美濃善の家は没落し、妻妾すべて離縁してしまつたのだが、錦八だ

けは出て行かず、こう言つたという。「御世話になつたからには、どうして旦那を抛つておけましようか」。そこで、錦八は元にもどつて看板を掲げ、稼いだ金で、美濃善を養つたのだそう。美濃善は錦八に厄介になること十五年、その後、行方知らずになつてしまつた。錦八は今でもよく飲むが、酔えば溜息混じりにぼやいている。「あーあ、あたしも年をとつたよ、昔みたいに、肉を引つ掴んで、犬に投げ与えるなんて、到底ムリな話さ」。私は、それを聞いて、何とも寂しい思いをしたものだ。

ほんの一時の夢を見たように思つていたが、もう十有余年になる

酒を酌み交わし、久闊を叙していても、何となく心寂しくなる
自分は鳥流しになつてゐるわけではないが

書生の着る青い着物を着ていた頃を思い出しては、涙を隠して
悲しげな糸の音を聴いている

評に云う。柳北君は、昔、幕府の上席の役に就いていた。粉骨碎身、役目に奉じていた。ご一新となり、時の流れが大きく変わると、さつさと身を引き、未練もなしに、浪人の気軽さを楽しんでた。要するに、人にへつらわないという気概があるのだ。それは文章を見れば分かる。つまり、この一篇は、ひとりの芸者の嘆き節を披露しているだけではないのだ。

頭評

① 嬌小二字描出精神

嬌小の二字、精神を描出す

② 醉妓嬌暈之状如見

醉妓の嬌暈の状、見るが如し

③ 攫肉氣概見於此

攫肉の氣概、此れに見ゆ

現代語訳

① 嬌小の二字が、この女の神髓を描き出している。

② 酔つ払つた芸者が色つぼく、沙汰のかぎりの悪口をふりまいているのを眼前にしているようだ。

③ 肉を引っ掴んだ気合いが、ここにはあらわれている。

阿清(柳橋)

呼んで才藏と做す、必ずしも才あらず。才藏、性、溫柔にして才氣に乏し。其の名に副はず。乃ち改めて清という。容姿清楚、声調清亮、始めて其の名に称ふ。一客、清に狎るる、日久し。竟に一男を拵ぐ。而して客遠く西国に去る。一信来らず。清、悒鬱、家に在り。近巷に好事漢有り。自ら螺贏と為りて、其の子を負ひ、以て清を攫く。清、喜んでこれに従ふ。橋西、狡兒法螺龜なる者有り。好んで幫間に擬す。常に好事漢の為に役使せらる。清を見る毎に、頭を縮め、背を聳やかし、蒲伏、屐を捧ぐ。殆ど后妃に謁するが如し。観る者、嗤笑せざる無し。吁、若し清をして才に長ぜしめば、則ちこれを称して柳

橋第一流の校書と謂ふも亦た可なり。惜しむべきかな。

麗質^③従来嫌粉紅 麗質 従来 粉紅を嫌ふ

病餘風骨太玲瓏 病余の風骨 太だ玲瓏

一枝冷艶梨花雨 一枝の冷艶 梨花の雨

人在銀屏珠箔中 人は銀屏珠箔の中に在り

評に云ふ。秦淮の妓、李十娘、名は貞美。余澹心曰く、「美は則ちこれに有り。貞は則ち未だし」と。お清の清、猶ほ貞美の貞の如きのみ。

余を以てこれを見れば、才と曰ひ、清と曰ふ、等しく是れ、其の名に称はざるなり。若し清字を分つて水青の二字と為せば、女子の水性、

乃ち是れなる無らんか。

○清亮 清らかで明るい。○悒鬱 憂鬱。○螺贏 蜂の一種。似我

蜂。じがばち。昔の人は、この蜂が他の虫を自分の巣に入れて、似

我似我と言ひ聞かせて育てると、他の虫が蜂に変わると考えた。○攫

引く。あつめる。○狡兒 ずるがしこい男。遊び人。○聳背 聳

は身をすくめる。背中を折り曲げる。○蒲伏 伏はらばう。○屐 履

き物。○嗤笑 笑あざけり笑う。○麗質 もって生れた美しさ。この

詩は、白居易の「長恨歌」を踏まえる。「天生麗質難自棄」。○風骨

身体のようなす。体格。○玲瓏 光り輝くさま。「樓閣玲瓏五雲起」○

一枝冷艶梨花雨 玉容寂寞淚闌啼 梨花一枝春帶雨。○銀屏 銀

屏風。「攬衣推枕起裴回 珠箔銀屏遡迥開」。○秦淮の妓李十娘 明

末の秦淮の花街を描いた、余懷の「板橋雜記」を柳北は愛読し、そ

の著『柳橋新誌』の成立にも、本書の影響がある。李十娘は『板橋雜記』にある妓女の列伝中のひとり。○余澹心あせきん 余懷あゐの字。

現代語訳

お清(柳橋)

お清は初め才藏という名で出ていたが、必ずしも才能があつたわけではない。才藏は、温和な性質だが、才気がなく、その名前にそぐわなかつた。そこで清と改めた。容姿が清楚で、歌声も清らかで明瞭なので、ようやく本人にとって清という名はふさわしいものとなつた。ある客が、この清に長く馴染んだことがある。それで、男の子が生れたのだが、その客は遠い西国のどこかへ帰つてしまつた。便りひとつあるわけがなく、清はすっかりふさぎ込んで、家に閉じこもつてしまつた。ところが、近所に物好きな男がいて、自分から似我蜂しがばちの役を買つて出て、その男の子を育て、清を家に入れた。清は喜んで男に従つた。柳橋の西側に、法螺亀という遊び人がいて、太鼓持ちのような振る舞いをしていたが、この物好きな男の使い走りさせられていた。亀は清の前に出ると、低頭し、背中を丸めて、這いつくばるがごとくして、履き物を差し上げる。まるで、やんごとなき身分の婦人に対するようで、周りの者は、皆な嘲笑した。まあ、かりに清が芸者としての才を伸ばしていれば、柳橋一の芸者と言われることもできたのに、残念だ。

生まれつきの美人は、白粉や紅を使わない

病み上がりの身体は、かえつてすき通つたように冴えている

雨に濡れた梨の花のように、ひっそりとして美しい
その人は銀屏風や玉すだれに囲まれたところに居る

評に云う。南京の秦淮の花街で名を売つた李十娘の名前は貞美という。余澹心がいうには「貞美の美は、李十娘にふさわしいが、貞というのは、どうかかな」と。お清の清も、貞美の貞に似たようなものだ。私に言わせれば、才藏の才、お清の清、ともに名前負けというところがある。かりに、清という字を分けて、水と青との二字にすれば、女性に備わつた水々しさがあつて、よろしいのではないか。

頭評

①名才藏而無所藏猶名財主而不主財然無才有貌猶博千金爲人所后妃視若空手無財爲人所奴視悲夫

才藏と名づけて藏する所無きは、猶ほ財主と名づけて財を主とせざるがごとし。然るに才無くして貌有るは、猶ほ千金を博して人の后妃視する所と爲るがごとし。空手無財にして人の奴視する所と爲るは、悲しいかな。

②奴而媚妓猶可余見客而媚妓者不知其何謂也使法螺亀見之不啻嗤笑奴にして妓に媚ぶるは猶ほ余見すべし。客にして妓に媚ぶるは、其れ何と謂ふかを知らず。法螺亀をして之を見せしむれば、啻に嗤笑するのみならず。

③詩極玲瓏無瑕恐詩高於人一等矣

詩は極めて玲瓏にして瑕無し。恐らく詩は人より高きこと一等なら

ん。

○博_{II}得る。

現代語訳

①才藏と言つても、何かを藏しているわけでないのは、財主と言つても、財を主としていないようなものだ。ところが、才能がなくて美貌があるのは、千金を手に入れて、人から后妃のように見られるようなものだ。何にもなくすつからかんで、人から奴のように見られるというのは、悲しいものだ。

②三下奴が妓女にへつらうのは、よくあることだが、客が妓女にへつらうのを、どう言えはよいのだろう。法螺亀にそのさまを見せたら、ただ嘲り笑うだけではすむまい。

③詩は最高の出来栄で、言うこと無し。多分、この詩はご本人より一段上か。

【第七十六号】

小清（柳橋）

後進の一小妓を以て、其の名、頓に柳橋に噪ぐ者は、小清なり。才^①人豪客争ひてこれを聘す。概^{おおむ}虚日無し。清、天賦^{せむやく}孱弱、客春、肺疾を患ふ。幾^{ほとと}ど起たず。某君、為に良医に乞ひて、纔に快復を得たり。然れども其の資性活達、酒量も亦た儕輩^{せいはい}を圧す。毎に自ら雛妓数名を率^{ひき}ゐて、龍山に遊ぶ。龍山の背、一亭有り。蓋し西京南禅寺

の瓢亭を模する者なり。清、酷だこれを愛し、遊ぶ毎に必ず此に飲む。清、自ら上座に踞し、衆雛^{しゅうしゅう}環座して飲む。酣歌談笑、傍若無人、嬌賊の山寨に宴する模様有り。而して其の賓客の座に在る、静婉溫柔、言ふ態はざる者の如し。抑も亦た奇なり。清、嘗て曰く「妾、若し数千金を獲ば、これを腰にし去り、小鬟数十輩と遍く南北の狭斜に遊び、乱擲、豪を買はば、則ち何等の快活」と。余、聴きて絶倒す。

病來寫照太嬋妍

病來 寫照すれば 太だ嬋妍

片片風花獨自憐

片片たる風花 独り自ら憐れむ

若使妙年悲薄命

若し妙年をして薄命を悲しましめば

小清應與小青傳

小清は応に小青とともに伝ふべし

評に云ふ。今を距たる十余年、新橋、小清と同名なる者有り。絶世の佳人、而して情致婉約、曲中に及ぶ者有る無し。未だ幾ばくならずして、一名士の為に聘せられ、墜りて嫡配^{あつぱい}と為る。既にして節を折り、書を読み、洋人に従ひて、語学を受け、略ぼ其の義に通ず。居ること三年、瘵^{まじ}を病んで歿す。葬に及んで、其の柩前に大書し、某夫人と曰ふ。送者千余人。亦た榮なるかな。爾後、其の名を襲ぐ者、陸続絶へず。未だ知らず、果して其の名に称ふや否や。

○孱弱_{II}孱はよわい。○儕輩_{II}ともがら。○龍山_{II}金竜山浅草寺。

○酣歌_{II}酒を飲んで楽しみ歌う。○写照_{II}人物の姿を描く。肖像を写す。○嬋妍_{II}嬋は美しい。艶やかで美しい。○妙年_{II}年が若いこと。

○小青_{II}中国清代の『虞初新誌』巻一の七に所収の「小青伝」にあ

る薄命の美人。詩才に秀でたが、嫁ぎ先の年上の妾に妬まれ、十八歳で死ぬ。○情致〓おもむき。○婉約〓しとやかで、控え目なこと。○陞〓シヨウ。のぼる。○嫡配〓正妻。○既而〓やがて。そうこうしているうちに。○折節〓今までの主義・態度を変える。○療〓肺結核。

現代語訳

小青(柳橋)

柳橋の若手の芸者の中で、最近よく耳にするのは、小青である。通人たちや金持ちたちが我先に座敷に呼んでくるから、清は毎日駆けずりまわっている。清は生まれつき身体が弱く、去年も肺病を患った。なかなか良くならないので、ある人が名医の診断を仰いで、少しずつ快方に向かっている。ところで、清はもともと快活な性格で、酒量も人並みはずれて、朋輩連中をしのいでいる。日頃、半玉の妓たちを引き連れては、浅草に出掛けるのを楽しみにしている。観音堂の裏手に料亭があって、あの有名な京都南禅寺の瓢亭のようなたずまいの店である。清はこの店を虫履にし、出掛けてはよく飲む。清は上座にでんと座り、これを半玉の妓たちが取り巻いて、飲めや歌えの大騒ぎ。女山賊が隠れ家で大宴会を開いているのを髣髴とさせる。それが、お座敷に出ると、清の態度は物静かで、おつとりと構え、殆ど口もきかないというから、人は見掛けによらないものである。清はこう言っている。「もし大金が転がり込んでくるようなことがあったら、お金を全部、腰にまいて外出し、半玉の妓た

ちを何十人も、東京中の花街に連れ回して、大散財の乱痴気騒ぎ、派手に遊んでやれば、どんなに胸がすーっとするだろう」と。私はその話を聴いて、ひっくり返りそうになった。

病み上がりの清の姿は、とても艶やかで美しいのだが風に乗る花びらのように、独りで物思いに沈んでいる

もし清が若年にして世を去るようなことになれば

小青は小青とともに、その名が後世に残るであろう

評に云う。今から十数年になるか、新橋に小青と同じ名の芸者がいた。これが、絶世の美人なのだが、物静かで控え目とくるから、お座敷は引きも切らず、新橋中第一の売れっ子であった。ところが、いくらか日が経たないうちに、さる高名な紳士に身請けされ、その人物の正妻に取った。やがて、花街にいたころの稽古事などはきっぱりやめて、本を読み、西洋人について語学を学び、外国語を習得するにいたったという。しかし三年後には、肺病を患い、この世を去った。葬式のときには、柩の前に大きな字で、某夫人と書かれてあった。参列者が千人を超えたというのも名譽なことだ。それからというもの、あつちでもこつちでも小青と名乗る芸者が後を絶たなかったというのだが、さて、名前負けでなければよいのだが。

頭評

①小青秀外慧中可稱名妓唯其傲然慢客者亦不允當世妓流之習何也
小青の外に秀で中に慧きは、名妓に稱ふべし。唯だ其の傲然として、

客を慢するも亦た当世妓流の習ひを免れず。何ぞや。

○慢Ⅱあなどる。

現代語訳

小清は見かけは美人、頭は賢く、名妓といつてさしつかえない。ただし、おつに済まして、客をあなどるところがあるのは、今時の芸者連中によくある傾向だ。何ということか。

清児きよこ（柳橋）

余、江湖に落魄する、既に十余年。其の間、禍福更迭、回顧すれば、一夢なり。丙子、獄に下るの前数日、亡児五郎の母と橋西の某樓に飲む。情懷、極めて悽なり。余曰く、「対酌無聊、宜しく一雛妓をして舞を奏し、寂寥を破らしむべきのみ」。絶嬌の小鬟を招き来る、即ち清児なり。乃ち命じて、曲を按おさぜしむ。鬟じよん窈窕ようてう、頗る観るべき者有り。余、笑ひて曰く、「一朶未開の花、人をして他日、必ず緑葉の感有らしめん」と。爾来、数裘さう葛かを経て、頃者、柳橋妓流の善く售る者を問ふ。皆な曰く、「清児なり」と。清児、今既に一大家を為す。然れども、嬌小、猶ほ当年、舞を奏するの時のごとし。蓋し小杜の所謂せうご舞腰ぶよく纖細せんさい掌中ていしゆうに軽き者に非ずや。

小清如醉阿清眠 小清は酔ふが如く お清は眠る

柳絮亂風花隔煙 柳絮 風に乱れ 花 煙を隔つ

呼做三清誰最好 呼んで三清と做す 誰か最も好き

清児才貌却雙全 清児の才貌 却つて双全

評に云ふ。蓋し文は彼に在る有りて、意は此に在る者、庸人をしてこれを見せしめば、意の在る所を求むる能はず。徒に嘖々いんいん焉として、これを称す。知らず、作者一笑し、以て門外漢と為すを。此の篇、清児を借りて、看舞の情景を説き出し、極めて悽絶。極めて情絶。人をして、黯然、神傷ましむ。末段更に舞腰纖細の四字を將つて、力を極めて、清児を表称す。而して意は彼に在らざるなり。

○余落魄江湖Ⅱ慶応四年四月、江戸開城にあたり、柳北は家督を養子信包に譲り、向島に隠棲したこと。○禍福更迭Ⅱ柳北の隠棲は明治四年の半はまで続くが、その後、いくつかの職を経て、明治七年、朝野新聞に迎えられ、後に社長を務める。○丙子下獄Ⅱ明治九年、柳北は讒謗律違反のかどで、鍛冶橋監獄に四ヶ月、獄にいた。○亡児五郎の母Ⅱ柳北の妾「らく」。五郎は夭折。妾宅は朝野新聞社に近い、三十軒丁堀にあった。○橋西Ⅱ柳橋の西側。○情懷Ⅱ心中の思い。○悽Ⅱいたましい。○悄Ⅱうれえる。かつて、柳北が愛着した柳橋は、維新後も繁栄はしたが、情緒纏綿たる華やきを失っていた。○対酌無聊Ⅱ二人で向き合つて酒を酌み交わしても、気持ちよく酔えないこと。○絶嬌Ⅱ一番人気。○按Ⅱ奏でる。○鬟じよん窈窕ようてうはしなやか。娜も同じ。しなやかで、なよなよしているさま。○窈窕Ⅱ奥床しい。しとやか。なまめかしい。○裘葛Ⅱ寒暑の移り変り。一年のこと。○小杜Ⅱ晩唐の詩人、杜牧。杜甫を老杜というのに対する。○舞腰

織細掌中軽Ⅱ杜牧の七言絶句「遣懷」の引用。ただし、「舞腰」は「楚腰」である。この稿は、「遣懷」を踏まえて記されているので、原詩を載せる。「落魄江湖載酒行 楚腰織細掌中軽 十年一覺揚州夢 贏得青樓薄倖名」。○柳絮Ⅱ柳の種子の上に生じる白い毛状のもの。熟すると綿の乱れ飛ぶ。○三清Ⅱ前出の小清・阿清と清児。○双全Ⅱ二つとも完全なこと。○庸人Ⅱふつうの人。○曉曉Ⅱ恐れて泣き叫ぶ声。○悽絶Ⅱこの上なく痛ましい。○悄絶Ⅱ静謐。

現代語訳

清児(柳橋)

わたしが隠棲してから、もう十年以上になる。その間には良くも悪くも色々あったが、思い起こせば一場の夢にすぎない。明治九年、下獄の何日か前であったか、すでに世を去っていた息子の五郎の母なる人と、柳橋の西のある料理屋で一献傾けた。色々な思いが駆け巡り、心中やるせないものがあつた。私は言った。「二人が向かい合つて盃を交わしても、なんとも侘びしい限りだ。若い妓を呼んで踊つてもらい、この場の寂しさをうち払おう」と。愛らしい少女がやってきたが、それが清児だつた。さつそく、鳴り物入りで、踊らせたのだが、いやはや、流れるような所作の、しなやかで、色っぽいこと。思わぬ掘り出し物であつた。私は冗談まじりに、「今は葉もつけていないような蕾の枝先だが、そのうちに葉も繁り、大樹に成長すること間違いなし」と言つたものだ。あれから数年、最近、柳橋に評判の芸者がいるというので、名前を聞いたら、清児だということではないか。

もはや清児は柳橋の押しも押されぬ大看板とは相成っている。ところが、その色っぽくて小柄なさまは、あの時の舞を舞っていた時と少しも変わっていない。まるで杜牧の詩句にある、その踊りの腰つきは細く、掌の上で舞っているように軽やか、という表現そのものだ。

小清は酔っているようで、お清は眠っているかのよう
まるで柳の綿毛が風に舞い狂い、満開の桜が霞の向こうに咲いているようだ

三清と世間では呼ばれているが、さて誰が一番になるのだろうか

清児が一番、才能も美貌もやっぱり言うことなし

評に云う。文章はお清のことを描いているが、真意は柳北の心中にある。凡庸の人に読ませても、この作の真意を理解できる者はいないであろう。ただ大げさにほめちぎるだけだ。柳北君は、分かる人には分かるのだ、と笑つて知らん顔しているに違いない。この文章は、清児の踊る姿を通して、その踊りのありのままを徹底して描き出しており、極めて痛ましくもあり、寂しさの極みとなっている。終りの段落を、楚を舞に変えて、舞腰織細の四字で、見事に清児の踊りを描き尽している。しかし、意図するところはお清の姿を描くことにあるのではない。

頭評

①四字伏後案

四字、後案を伏したり(落魄江湖が舞腰織細につながること)

②仍用小杜故事筆力自在

仍ほ小杜の故事を用ゆ。筆力、自在なり

③應筆

筆に応ず

現代語訳

①後半にある四字の表現を暗示している。

②杜牧の世に知られた詩を借りながら、柳北独自の文章力を使いこなしている。

③清児の実態とあつている。

【第七十七号】

阿十(柳橋)

阿十は原と新橋の妓なり。嘗て某妓と隙有り。為に家を柳橋に移す。其の名、一時に震ふ。後、故有りて籍を脱す。暫くして旧に復す。其の声価、前に比すれば少しく衰ふ。然れども、風流才子、若し瀟洒軽妙の人を求むれば、則ち南にして国助、北にして十、其の選に当る。十、脚疾有り。冬より春に迫ぶ。毎に客を謝して家に臥す。一客、謂へらく、其の家居、必ず無聊に禁へずと。窃かにこれを窺へば、十、案に憑り、手、稗史を綴り、孜孜として倦まず。客、大いに驚き、就きて其の書を借らんと請ふ。十、笑ひて曰く、「妾、自ら妾の情事を写す。既に数十巻を累ぬ。然れども是れ一家の私乗、何ぞ肯て人に示さん」と。其の情痴亦た想ふべきなり。

欲下佳評也自疑

佳評を下さんと欲して 他た自ら疑ふ

大痴如慧慧如痴

大痴は慧の如く、慧は痴の如し

姑將肉眼品風致

姑く、肉眼を將ちて 風致を品すれば

月白水晶花一籬

月は白し 水晶 花一籬

評に云ふ。嘗て聞く、柳橋、阿十と名づくる者有り。一狡児と狎れ、落籍、家に在り。頗る洋語を習ふと。知らず、斯の妓は即ち是なるか、或は別に其の人有るか。果して聞く所の如きは、佳人を点汚す。頗る惜しむべきなり。妓にして画を作り、詩若しくは歌を善くす、嘗てこれを聞く。未だ小説を作る者有るを聞かず。果してこれ有らば、李十娘、余澹心、并せて一人を為すなり。奇甚だしく、妙甚だし。若し漁史に代へて、国字を以て情譜を撰せば、吾、此の書と世に並び行なはるを知る。唯だ其の頌有りて規無きを恐るのみ。

○隙||亀裂。仲違い。○南||新橋○北||柳橋。○脚疾||脚氣。○案||机。○稗史||民間のこまごましたものを、記録したもの。野史。転じて、小説、物語。○孜孜||休まずげむこと。○私乗||私史。○風致||人のようす。すがた。○点汚||よごす。

現代語訳

お十(柳橋)

お十は、もともと新橋の芸者であったが、他の芸者と争いが生じて、柳橋に移った。柳橋では一挙に名前が売れた。後にわけがあつて廃業したのだが、しばらくして舞もどつて来た。しかし、以前ほどの

人気はなく、やや落ち目になっていく。とはいえ通人たちが好む、さっぱりとして軽妙な芸者を求めるとなると、新橋では国助、柳橋ではお十ということになる。お十は脚氣の病があり、冬から春にかけて、具合が悪い。その時期になると、お座敷を断り、家で寝ている。ある客などは、お十も家に閉じこもってばかりでは、退屈して居るだろうと思つて、そつと、お十の家を覗いたそう。すると、お十は机に向かつて筆をとり、小説を書いて、手の休む間もなかった。客は吃驚して、お十の家に上がり込み、いま書いているものを借してくと頼んだ。お十は笑いながら、「あたしはね、今まで、馴染みを重ねた男たちのことを、書いているのさ、もう、随分たまつていけるけどね。でもさ、これは内輪のことだから、他人様にお見せするような代物ではありません」と相手にしなかつた。お十の情痴的生活を想像したくなるというものだ。

好い評価を与えようとしたが、どんなものかしら

愚か者のように見えて利口者であつたり、またその逆もある

ここはひとつ、じっくりと人物を見極めて見よう

皓々と輝く月の光をあびて、垣根に咲いている水晶のような一輪の花にもみえる

評に云う。昔、柳橋にお十という名の芸者がいたということを、聞いたことがある。遊び人の男と馴染になり身請けされた。家で熱心に西洋語を習っていたそうだ。これがここで取り上げているお十だろうか。あるいは、別人か。わたしが聞いたところの話であるとす

ると、やはりそれは美人を汚すものである。とても残念なことだ。芸者ながら、絵を描き、詩をつくり、歌を詠むのに聞いているといった例は以前にはよくあつた。でも、小説を書くという話は聞いたことがない。もし、そういう芸者がいるとしたら、『板橋雜記』に出てくる李十娘と作者の余澹心を併せて一人にしたようなものだ。そんなことは、非常に珍しいことだ。お十が柳北君にかわつて、漢文でなく、大和言葉でこの情譜を書くとするれば、柳北君の情譜と、お十の書いたものが、二通り世に出ることになるが、それをほめるばかりで、戒めるところがないものになることだけを恐れている。

頭評

①不圖妓中有一春水昔者崔姬與張生狎臨死自寫其貌風神生動阿十之著亦如此也

図らずも、妓中に一春水有り。昔、崔姬と張生と狎れ、死に臨んで自らその貌を写す。風神、生動す。阿十の著も亦、此の如きなり。

○春水Ⅱ人情本の作者、為永春水。○崔姬・張生Ⅱ元代に書かれた越劇『西廂記』に登場する、崔鶯鶯と張君端。唐代に書かれた『鶯鶯伝』を翻案する。○風神Ⅱ風采。

現代語訳

①思いもかけず、芸者連中の中に、春水ばりの女がいた。昔は、崔姫と張生が愛し合い、死ぬ間際に自分たちで、互いの姿を書き残し

たという。それはまことに風采が生動していたそうな。お十の書いたものも、そのようなものであろう。

阿春(柳橋)

妓中に長者有り。その名を春といふ。性、温厚しつかく質懇、久しく花柳に墮ちて、その風習に染まず。猶ほ尋常人家婦女のごとし、亦た奇ならずや。初め籍を掲ぐる、二歳余り、尾藩士某、娶つて以て側室と爲し、一女を拵ぐ。未だ幾ならず、某、罪を獲て、自裁す。春、その爺嬢と遺孤とを養ふの資無きを以て、復た出て技を售る。親に事ふるに至孝、読売新聞、嘗てその孝を記す。その宴席に在る、善く客を待つ。而して毫も儕輩と争はず。唯だ謹むのみ。然れども性、酒を嗜み、酔へば則ち較やや豪氣有り。善く談じ、善く諳す。大いに酔へば、則ち席を逃げて睡る。余、毎に云ふ、「阿春、飲まざる時、河伯陸に上ると一般」と。或は、春に説きて曰く、「姐々そそ、盍なんぞ速かに従良せざる。青春、過ぎ易し。悔やむとも及ぶなし」。春曰く、「妾の母、既に亡す。父老ひて、善く病む。妾、未だ以て他に適くべからざるなり」と。以て、その人と為りを知るべし。

揚州猶着老樊川 揚州 猶着く 老樊川

不是憐卿是自憐 是 卿を憐れむならず 是 自ら憐れむ

禪榻未甘茶味苦 禪榻 未だ甘せず 茶味の苦きを

緑陰留我喚航船 緑陰 我を留めて 航船を喚ぶ

評に云ふ。親に事へ、孤を撫す。宛然、一貞婦。凶らざりき、狭斜

中に於てこれを得んとは。但だ未だ孤女を養ふに何の道を以てするを審らかにせず。若し之に鍼繭しんけん女工を教へて、良女子と為さば、可なり。然らざれば、妓、妓を生じ、娼、娼を生ず。幾何かその良人を辱しめざらんや。

○長者|| 德行のある人。○質懇|| 飾り気がなくて誠実なこと。懇はつつしむ。まこと。○尾藩士|| 尾張藩の武士。○自裁|| 自殺。○爺嬢|| 父母の俗称。○遺孤|| 忘れ形見。遺児。○河伯|| 水神。河童。○姐姐|| 姉、または女子の敬称。○樊川|| 晚唐の詩人、杜牧の号。杜牧には、揚州を舞台にした詩が多く有る。この七言絶句は杜牧「題禅院」を踏まえる。「航船一棹百分空 十歳青春不負公 今日鬢絲禪榻畔 茶煙輕颺落花風」。老いた杜牧がかつて遊んだ揚州の地で、過ぎし日を想い、わが青春に悔いなしの心境を唱っている。○禪榻|| 坐禅を組む腰掛け。○航船|| 大きな船のような盃。航は船のように反り返った形の盃。○宛然|| あたかも。○鍼繭女工|| 鍼針仕事。女性の仕事。

現代語訳

お春(柳橋)

芸者の中にも德行のある者がいて、その名を春という。性格は温厚にして飾り気がなく、誠実である。長きにわたり花柳社会に身を置いているが、少しもこういう社会の悪習に染まらず、まるで堅気けんきの家の女性のようなのである。まあ、滅多にあることではない。お披露

目してから二年して、尾張藩士某が身請けして、お春を側室とし、女の子が生れた。いくらも経たないうちに、その男は罪を犯して自殺してしまった。お春は、その男の両親と、忘れ形見の女の子を養うための金がなかったので、元のお座敷に出て、芸事で身を立てた。その親孝行ぶりは並外れていたので、読売新聞に記事が載せられたことがある。お春は宴席では座持ちがよくて、芸者仲間と争うこともなく、ひたすら身を慎んでいる。ところが、生まれつき酒が好きで、酔いがまわると、気が大きくなり、大いにしゃべり、大いに笑わす。飲み過ぎると、そつと席をはずして、眠ってしまう。私は、つねづね言うのだが、「お春は飲んでいないときは、陸おかに上がった河童と同じだ」と。あるいは、お春に向かっている、「姐さんよ、どうして早く嫁入りしないのだ。若さはいつまで続くものではない。後から悔やんでも手遅れなのだ」と。するとお春は、「おつかさんは死んでしまったけど、おとつあ年は年老いて、おまけに病気がち。だから、あたしとしてはお嫁に行くわけにはいかないの」と。お春という女は、こういう女なのだ。

揚州にはいまだに老いた杜牧が執着しているが

そこでは女を憐れむのでなく、わたしが憐れんでいる

まだ杜牧のように禅寺の椅子に腰掛け、抹茶を一杯飲むという

ような境涯にはなっていない

緑陰にわたしを引き留めて、大きな盃で酒を所望する

評に云う。義理の親につかえ、忘れ形身の女の子を育てる。まるで、

貞女の趣がある。こういう女を花柳の世界で見出すとは、思いもよらぬことである。ただし、この女の子を、この先どうしようとしているのがはつきりしない。かりに、この子に裁縫仕事でも教えて、まっとうな女に育て上げれば、言うことはない。そうでないと、芸者が芸者を生み、女郎が女郎を生むことになる。それでは死んだ亭主が浮かばれないであろう。

頭評

①其名曰春青春易過自然照應絶不費力所以爲才筆

其の名を春と曰ふは、青春の過ぎ易きに自然に照應す。絶へて力を費さざるは、才筆爲る所以なり。

②漁史意氣益壯従此千百年猶少年也

漁史の意氣、益ます壯ん。此れより千百年、猶ほ少年ならん。

○千百||たくさん。多数。

現代語訳

①その名は春であるが、青春は過ぎ易いことと自ずから照應している。無理矢理に力を費やさないとというのが、柳北の才筆たる所以であろう。

②柳北君の意気はますます盛んである。この先、どんなに時間が経過しても、少年のごとく、新鮮なままであるだろう。

【第七十八号】

① 阿文（柳橋）

一諾千金、古人、これを称す。柳橋に善諾妓有り。人呼んで、一諾一金といふ。客年、籍を脱し、その義妹をして己に代らしむ。乃ち、阿文なり。文、姉の名の業を継ぐと雖も、其の容色と志操と姉に優ること万々。今春、本地、籍を掲ぐる者、皆な生鉄のみ。文、独り錚々として声有り。紳士豪客、日に相招致す。頃ろ聞く、「柳橋某様、梨花海棠の句を唱ふる者有り」と。或は云ふ、「是れ文の事に係はる」と。文や才有り、貌有り。後來、大成期すべし。余、窃かにその姉の善諾に倣はざるを望む。

大姐 人へ歸し 小姐来る

狗貂易地也奇哉 狗貂 地を易ふ 也た奇なるかな

金姫何及鳳齡色 金姫 何ぞ及ばん 鳳齡の色

紅杏憐嬌袁子才 紅杏 嬌を憐れむ 袁子才

評に云ふ。一諾一金、醜は則ち醜たり。若し夫れ妙に圈套を設け、巧に媚術を施し、迷路に引入る、厥の患へ測られず。反つて一諾一金の事、簡にして意足るにしかざるなり。妓を責むるに志操を以てするは、これを屠者、仏を念じ、偷兒、経を講ずるに譬ふ。亦た人情に遠からずや。

○一諾千金Ⅱ一度承知して引受けたことに、千金の重みがある。○善諾Ⅱ然諾。引受けること。○一諾一金Ⅱ安請合いすること。転じ

てお金で転ぶ枕芸者のことか。○万万Ⅱはるかに勝る。○生鉄Ⅱ銑鉄。不純物の残る鉄。ここでは、駆け出しの芸者の意。○錚錚Ⅱ金属がぶつかり合う音。○梨花海棠Ⅱ「梨花」「海棠」ともに漢詩における美女の喩え。つまりそのような漢詩を口ずさむの意。○狗貂Ⅱ狗尾統貂。りっぱなものの後につまらぬものを続けること。○易地Ⅱ立場を変える。○金姫Ⅱ未詳。○鳳齡Ⅱ未詳。○紅杏Ⅱ未詳。○袁子才Ⅱ中国・清の詩人・文人の袁枚の字。『随園詩話』『随園食單』で知られる。○圈套Ⅱ策略。わな。○厥Ⅱその。それ。○屠者Ⅱ食用の獣肉を殺すことを職業とする人。○偷兒Ⅱぬすびと。

現代語訳

お文（柳橋）

一度承知して引き受けたことには、千金の重みがある、とは昔から言われている。柳橋に容易に転ぶ枕芸者があり、人から「一諾一金」と喚ばれている。その芸者は去年廃業し、義妹が後を継いだ。これがお文である。お座敷に出て見ると、姉に勝る器量と気風で大受けしている。この春からお披露目した芸者連中は、どれも今ひとつの感があるが、お文だけはあちこちから声がかかり、高官や豪商の宴席が引きも切らない。この間、耳にしたのだが、柳橋のさる料亭で、梨花海棠の一句を唱う者がいるという。どうもこれは、お文のことと関係している節がある。お文は頭も切れるし、見た目もよく、將來必ずや出世するであろう。私はひそかにお文が姉に倣って容易に転ばぬことを望んでいる。

姉は堅気になり、妹が代りに看板を出した

同じ名で売れっ子とそうでないのが入れ変わったというのも、珍

しい話だ

金姫はどうしても鳳齡の色気には及ぶまい

紅杏 美人を憐れむのは袁子才だ

評に云う。わずかなお金で転ぶのはたしかに醜いことである。しかし巧にわなを仕掛け、媚を施して人を迷路に引入れるとしたら、その禍いたるや測りしれない。それよりかわずかなお金で転ぶ方が、簡単に気持も満足できるだけましである。芸者の落度を責めるのに、道徳的に是非を問うのは、屠殺屋に仏心を求め、盗つ人が説教をするのと同じであつて、人情にもとる行為である。

頭評

①落想妙甚

落想。妙なること甚だし

②何等婉約

何等の婉約

③梨花海棠亦是一段好景勝梅花荆棘數等矣

梨花海棠も亦た是れ一段の好景、梅花荆棘に勝ること数等なり。

○落想Ⅱ着想。○婉約Ⅱしとやかで、控え目なこと。

現代語訳

①着想がまことに絶妙と言うしかない。

②何という気品、そして程の良さ。

③梨花海棠もこの上なく好ましい景色であり、梅花荆棘よりはるかに上回っている。

愛子(柳橋)

若し愛子に擬するに、鬪当童子を以てすれば、その柳眉を豎て、星眸を顧らすや、必せり。而して彼將に翹翹然として、速かに成らんを欲するの心有らんとす。柳橋の雛妓、阿愛、愛助、愛子有り。号して三愛と為す。而して愛子、冠爲り。其の性、極めて敏捷。宴に侍し、酒を行る、往来、飛ぶが如し。群雛、敵せざるなり。然れども、若し痴客呆妓の団を為すに会へば、則ち愛子、坐して烟を吹く。時に老妓を傾使し、毫も憚る所無し。一髻客有り。酷だ愛子を愛し、屢々之を撫す。愛子、肯せず。余、嘗て戯れて曰く、「汝、髻を愛するや」と。愛子、曰く、「否々」と。余、笑ひて曰く、「詐なるかな。汝、髻をこれ愛せずして、何を愛せん」と。愛子、鞦韆して曰く、「奚ぞ、夫の髻髻たる者を以て、為さんや」。余、覚えず噴飯す。然れども、愛子、他日、大いに愛する所の者有るをば、則ち彼の髻髻たる者を愛せざらんと欲すと雖も、而か得んや。本年四月、愛子、墜りて大妓の列に入る。年紀、僅かに三五と云ふ。

面天々映鬢星々

面の天々は映ず 鬢星々

一曲嬌歌帶笑聽

一曲の嬌歌 笑ひを帯びて聴く

猶是小園春意淺 猶ほ是れ 小園 春意淺し

未知柳眼爲誰青 未だ知らず 柳眼 誰が為に青きを

評に云ふ。漁史、愛子を以て、此の篇を終わる。蓋し其の名を借りて、諸名妓を評するなり。余、復た將に之を借りて以て、漁史の奇文を評せんとす。然れども、其の文は則ち余これを愛す。其の才は則ち余これを畏る。

○關当童子 關党童子の誤植。論語・憲問第十四「關党的童子、命を將^{おきな}う」。關党は地名。童子が玄関番として來客の言葉の取次ぎをしていたという話。子供のくせに大人の真似をしたがると、孔子は評した。○星眸 清眸。澄んだひとみ。○翹翹然 高く伸び上がるさま。○頤使 頤あごで使う。○髻客 髻づらの客。○摟 引く。引き寄せらる。○髻髻 鬢の多いさま。○年紀 年齢。○面天天 詩經の「桃夭」を踏まえ、愛子の容貌をいう。若くて美しいさま。○星星 細かいものさま。ぼつぼつとあるさま。○柳眼 柳の新芽。細長くて、人の目の細く開かれたのに似るのでいう。

現代語訳

愛子(柳橋)

かりに、愛子を關当童子に擬えたら、きつと愛子は柳眉をさかだて、綺麗な目をお見開いて怒るのであろう。愛子は心を高く持して、早く一人前になると心がけているのである。柳橋の若い芸者には愛の字がつくのが三人いて、お愛、愛助、愛子で、三愛となる。な

かでも、愛子が頭株で、気性は敏捷である。宴席で酒を注いで回るとき、その素早いこと飛ぶがごとくで、他の若い妓にはとても真似

のできるものではない。ところが、宴席が乱れ、客も芸者も車座になつてくると、愛子は離れたところに坐つて、平然と煙草を吹かしている。時には、先輩の芸者をあごで使つたりして、遠慮がない。あるひげ面の客が、愛子にぞつこんとなり、たびたび座敷に呼ぶのだが、愛子は断り続けた。私は以前、愛子に冗談半分に言ったことがある。「お前さん、髻男好きなのか」と。愛子は、「とんでもない」というので、私は笑いながら、「それでは、話が違つてはないか、一体、髻が駄目なら、どういふのに惚れるのか」と聞くと、愛子は、眉を顰めてこつと言つた。「でも旦那、あんな髻ぼうぼうの男に、惚れたもんでしょ」と。私は思わず吹き出してしまったのだが、いつの日か、愛子が心から惚れた男に出会つたとして、そいつが髻ぼうぼうだから駄目になるとは、果して言えるのかしら。今年の四月に、愛子は一人前の芸者になつたそう。まだ年は十五歳だといふのに。

愛子の容貌は若くて美しくかがやいており、髻のほつれ毛がちらほら

お座敷唄がはじまると、笑みを浮べて耳を澄ます

春まだ浅い庭の花木のように、愛子は幼いから

細くて切れ長の眼は、この先誰のために青い光りを放つのかしら

評に云う。柳北君は、愛子の記事で、初篇を終える。これまで、名

前を羅列して、それぞれ評判の芸者を品評してきた。私は柳北君の文章を使つて、その彫琢の文章を批評したのである。それにつけても、私は柳北君の文章を敬愛し、その才氣に畏れ入っている。

らんとす。未選の諸校書、請ふ、落第の想を為すなかれ。
己卯五月

湊上子識

頭評

①其美與伶俐極可愛其無所憚極可畏也

杜長 成島柳北
編輯兼印刷 磯部 節

其の美と伶俐とは極めて愛すべし。其の憚る所無きは、極めて畏るべきなり。

②其所謂否々者安知爲釣髻之香餌乎

其の所謂る否否なる者は、安くんぞ髻を釣る為の香餌なるを知らんや

現代語訳

①愛子の器量よしで、利口なところは、まことに愛すべきであり、傍若無人なところは、まことに畏るべきである。

②いやいやを言うのは、髻男を釣り上げるための香ばしい餌なのである。

(結語)

①余斯の譜を編し、有名校書を新柳二橋に選ぶ。各十二名、蓋し二十四番花信に比するなり。而して取捨、皆余が欲する所に従ふ。敢て此れに遺る者、皆な観るに足らずと謂はんや。其の番額、限り有り。故に愛を割くのみ。頃日、將に更に二十四名を選び、以て統編を綴

情譜統編ハ後号ヨリ掲載ス可シ

○二十四番花信 二十四番花信風。二十四節季の小寒から穀雨までの間の各気の開花を知らせる風。小寒 梅・山茶(椿)・水仙 大寒 瑞香(沈丁花)・蘭・山簪 立春 迎春(黄梅)・桜桃(英桃)・望春(辛夷) 雨水 菜・杏・李 啓蟄 桃・棗棠(山吹)・薔薇 春分 海棠・梨・木蘭 清明 桐・麦・柳 穀雨 牡丹・茶靡・棟。○己卯 明治十二年。

現代語訳

私はこの系譜を編集し、有名な芸者衆を新橋・柳橋の中から選んだ。それぞれ十二名を挙げたのは、二十四番花信風にならつたからである。取捨選択は私の好みによつたものであり、選にもれていないからといって、その芸者をないがしろにしているわけではない。二十四人という制約があるのだから、心を鬼にしてははずしたのだ。いづれ、さらに二十四人を選び、統編を書こうと思つている。選にもれた芸者衆の皆さん、どうか落胆しないで欲しい。

明治十二年五月

瀬上漁史識す

飾りを、柳北君の長寿を願って捧げているようだ。後世に遺る芸者
列伝を仕立てて欲しいものだ。

頭評

①裁碧剪紅排次位置一歸其手裏漁史即東皇矣孰不北面臣事之
碧を裁し、紅を剪り、排次位置するは、一に其の手裏に帰す。漁史
は即ち東皇なり。孰れか北面してこれに臣事せざらん。

②得瀬上子之評隲重於九鼎大呂吾知粉白黛綠者爭拋簪珥爲先生壽請
立佳傳也

瀬上子の評隲を得るは九鼎大呂より重し。吾、粉白黛綠の者、争ひ
て簪珥を先生の寿の為に抛ぐるを知る。請ふ、佳伝を立てんことを。

○裁碧剪紅 芸者の品定め。○排次位置 並べ置くこと。番付か。
○手裏 手の内。○東皇 春を司る神。○北面 臣下として、君に
仕える。○評隲 批評すること。○九鼎大呂 古代中国における、
王権の象徴。鼎は三本足の青銅器。大呂は古代中国・周の大廟の大釣
り鐘。○簪珥 かんざしと、みみだま。○粉白 白粉。美人。○黛
緑 まゆずみの色が青い。美人のさま。

現代語訳

①芸者を品評して、あれこれ番付するのも、柳北君の手の内にある。
柳北君は春の神様のようなものだ。だから、芸者諸君は、頭を低く
して侍るしかない。

②柳北君の品評は、きわめて権威がある。芸者衆は争って自分の髪